銀色の悪魔…4th Stage(プロジェクトD編)

SilviaSilvermoon

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シリーズ４作目。結構続けてます^　;;;;お話し的には３ｒｄが特別編だったので時系列で行くと

２ｎｄの続きという事になります。（話の流れ上、３ｒｄの内容が入ってくることがあります。でも、

なるべく辻褄は合うようにしていくつもりで居ます。）

この辺りからは…キャラの名前以外はほぼ原作から離れてしまって、オリジナルの話がてんこ盛りになってきますけども…まあ、広い心で見てください^　;;;;

目　次

さて…時系列にまとめてみようじゃないか。 ―――― 1
夏の終わり… ―――― 20
超・マジモード…暗殺者（アサシン）ばりの殺気全面開放!! ―――― 39
ケーキ屋を訪れる常連さんが… 56
取り敢えずその後のプロジェクトDはというと… ―――― 68
で、週末…を前に車が無事戻る。 91

さて…時系列にまとめてみようじゃないか。

この日…さつきは休みで朝から天気も良かったので家を掃除したけどまだ午前中だったので勢いでＳ１３とＳ１５更に美奈子のＮＯＴＥも洗車して…たまには充電させたいって言うのもあって、

碓氷にでも行ってくればそこそこ充電も出来て楽しめるかなって思ってＳ１５で出発し、上信越道の松井田妙義で降りて一路碓氷峠を目指す。

近所のスタンドで給油と空気圧チェックをしたついでに碓氷峠について聞いてみた。

やっぱりＩｍｐａｃｔＢｌｕｅの名前は絶大。真子ちゃんが離れた後も沙雪が１人で走ってても目立ってる様だ。

さつき心の声『（へえ…原作じゃ横に乗ってるイメージしかないけど、お嬢って結構走れるんじゃん。）』

教えられた道を進んでいざ碓氷峠へ。誰にも連絡してないから今回はコーチも居ないし、自力で進めていく事にする。まずはグリップで５０％位から３セットこなす毎に１０％ずつ上げるという方法で徐々にペースアップ。平日の昼間は…さすがに空いてるから飛ばしやすい。でもお巡りさんが来そうで怖いのはあるけど…ね。

何とか８０％で軽～くドリフトができる位にした所で夕暮れに。
さすがに夕方の混雑時は避けたかったので、今回はここで打ち切るつもりで戻りながら美奈子の勤めてるケーキ屋へ。顔を出したら美奈子は休憩中で^^；；；呼ぶのも大変だし…大人しくチョコレートケーキとチーズケーキを買って駐車場に戻ると…出くわしちゃったじゃん…お嬢に。
沙雪「あれぇ～！どうしたのこんな所で珍しいねえ？美奈子居た？」
さつき『あ、今休憩みたいで居なかったから取り敢えず俺の好きなチョコレートケーキとチーズケーキ買ってきた。』
沙雪「なぁんだ、言ってくれればいくらでも持って行くのに。ケーキとか食べるなんて思ってなかったからさあ…男の人ってあんまり食べるイメージ無いからさあ。」
さつき『そっか？俺、結構好きだよ？ケーキ類は。あ、さっき暇でさあ碓氷ちょこっと行ってきた。結構トリッキーなんだね。スタンドのあんちゃんがＩｍｐａｃｔＢｌｕｅの事推しててさ。沙雪も結構走れるって言うのを聞いて今度一緒に行こうかなってさ。軽く流してコースは頭に入れてきたよ。』
沙雪「あ、そうなの？じゃあ今夜デートしようよ？ね？碓氷で良いよねえ？」
半ば強引に約束させられた…。そこで一瞬頭をよぎったのが…。

さつき『あ、美奈子に一応断り入れとかないといけないか？』
沙雪「あっ、確か今日ってさあ…店舗の歓迎会があったと思ったけどなあ？そう言われると心配になって来たから…一応確認取っとくわ。」
ピッピッピ…スマホを巧みに操作しメールを打って担当者に確認してる沙雪。
沙雪「あ、やっぱりきょう歓迎会だって。８時スタートだと思うから…多分１０時過ぎまでは終わらないでしょ…家に着くのが１０時半とかじゃない？メモで残しておけば…美奈子はご飯も作れるし大丈夫だと思うけどなあ…？」
さつき『じゃあ、取り敢えず家にケーキ置いてメモを残してくるから何時に集合？』
沙雪「今…６時でしょう？あたしも１回帰るから７時半位にここでも良い？」
さつき『ＯＫ^^ じゃあ…あとでな。』
一旦沙雪と別れて家に帰って冷蔵庫にケーキを入れ、メモを残してそのまま家を出る…
スタンドによって一応半分よりちょっと上にあったけど…交通費の分でこっちに給油して美奈子のケーキ屋の駐車場に向かう。
すると美奈子がまとめたゴミをストッカーに入れるため出てきたので、今日歓迎会なのを確認。冷蔵庫にケーキが入ってるのと沙雪と会うので美奈子の方が早かったらご飯食べて適当にしてって伝えて車に戻るとちょうどお嬢が来た。

２台で一旦お嬢の家にシルエイティを置き、Ｓ１５で碓氷へ。
沙雪はＳ１５に乗ったのが初めてだったこともあって常に上機嫌。とりあえず８０％で碓氷を１周してみることに。
沙雪「驚いた…今日の昼間だけでここまで走れちゃうんだ（早めに出てきてた地元の小僧たちより速い〃湘南ナンバーのＳ１５〃に沙雪が素直に驚いている）…さすが〃銀色の悪魔〃もうちょっと一般車が減ってＣ＝１２１がガラ空きになったら全開のドリフトしてるの見たいな^^」
さつき『そしたら…先に夕飯食べちゃうか？時間ずらしてもう１回来れば良いじゃん。』
そして夕飯を食べて…良さそうだったので９０％をすっ飛ばして横に指示してくれる人が居るので
一気に全開…沙雪が測ったストップウォッチの一発勝負の記録は…公式記録での最速の下りの記録…真子ちゃん運転のＩｍｐａｃｔＢｌｕｅの持つ記録を一気に１２秒更新しましたとさ^^；；；やっぱりＣ＝１２１の全開でドリフトは面白い^^
沙雪も喜んでくれたしプロジェクトＤの練習にもなるし大満足です（^^♪

（※―ここからはさつきｓｉｄｅで進行します―）

碓氷から帰って来て…休みの度に出歩くようになった。
神奈川を含めて転戦が予定されてる峠をめぐりながら、自分なりにコースの攻略を考えてみる。
ケンタの持って来る車載の動画の運転が無茶苦茶で正直あてにならない。
〝良くこれで拓海や高橋　啓介が理解できるんだなあ？〟と感心してしまう位^　;;;;
（俺の理解力の問題かも知れないけども…モノには限度って言うでしょ？^　^　;;;;）
って事で最近は自分で現地に行くようになった。
（※もちろんピンチヒッターの件は頼られ過ぎても困るという事で高橋　涼介からも口外しないように言われてる為、拓海や高橋　啓介に遭わない様にしてるけどね（;^　—^）Ａ。）
ただＳ１５やＳ１３は目立ってしまうので専ら偵察にはＮＯＴＥで行って、まずは現地の地形などを歩いて確認…その後走ってみるパターンが多くなった。（※こう言う事があったので、Ｓ１３を美奈子にやって群馬ナンバーに交換したＮＯＴＥと交換でも良いなって思うようになった。）
久々に高橋　涼介が会いたいと言ってきたので、早番で上がる日に高崎駅近くのファ

ミレスで待ち合わせた。俺の方が先に着いた為Ｓ１５を置き、奥の方の入り口からは見えにくい所の席でドリンクバーを頼んでコーラやメロンソーダーを飲んでいた。

高橋　涼介「ヲイヲイ、もっと何か頼んどけば良いのに…質素だなあ？」

さつき『おっ…来たねぇ。って言うか、経費掛かり過ぎてんじゃないか？かなり移動の交通費だけでも凄まじい額だろうに…』

高橋　涼介「まあ…それ位は計算に入ってるさ。さつきの交通費だって出そうと思ってたんだぜ？領収書持ってるか？」

さつき『とりあえず取ってはあるけどさ…群馬、栃木、埼玉だけで交通費が３万超してるぞ？

一応俺もスタンドの社員だからガソリンやオイル、タイヤに対しては従業員価格ってもんがあるから良いけど…高速代だけは何ともならなくてな。』

高橋　涼介「それで最近Ｓ１５やＳ１３ではなく…従妹のＮＯＴＥを使ってるのか？」

さつき『おいおい、ずいぶん詳しいじゃね～か？従妹の美奈子を狙ってるのか？

まあ、ガソリン代だけじゃないさ。ＮＯＴＥの方がより風景に溶け込みやすいから拓海や啓介の目をごまかしやすいかなってさ。ピンチヒッターの件は極秘なんだろう？少しでも目立たないほうが良かろう？』

高橋　涼介「まあな…あのＳ１５は目立つからな。地元の連中も意識しだすだろうしな…そりゃ構わないが従妹のＮＯＴＥの距離が延びると問題出ないのか？」
さつき『だから問題がら出る前にあのＳ１３と交換しておこうかと思ってな。』
高橋　涼介「そうか…あのＳ１３をなあ。ああ、ちょっと調べさせてもらったが…
従妹の美奈子さん…だっけか？あの人が〝漆黒の闇に浮かぶ銀色の幽霊（ゴースト）〟だったなんてな…この前Ｓ１３を振り回して使ってるのを見かけたもんでな…
ちょっと調べさせてもらったらさつきの所のスタンドに入っていくから関係者で間違いないと思ったんだが…まさか従妹で〝銀色の悪魔〟と〝漆黒の闇に浮かぶ銀色の幽霊（ゴースト）〟がこの群馬で同居してるなんて考えもしなかったぞ？
昨日、親戚の叔母さん達が来るって言うんで、急遽ケーキ買いに行ったら、接客で出てきて驚いたさ。向こうは〝何でここに？〟って言う顔をしてたけどな。」
さつき『へえ～色々調べるねぇ…ふむふむ、そんな事がねぇ…って言うか
群馬の走り屋の頂点の高橋　涼介がケーキを買いに行くってかなりレアな感じするけどな…
へぇ～想像つかないな。フフフ（ ´ ∀ ｀）あ、ついでに言っておくとな…
あのケーキ屋の社長令嬢が碓氷のＩｍｐａｃｔＢｌｕｅの沙雪だわ。何とかして美

奈子を真子ちゃんの後釜にしようとしてるみたいだけどな…』

高橋　涼介「ほう…それはそれでまたすごい取り合わせではあるが…厄介な相手になる事は間違いないな。」

さつき『まあ…厄介であることに間違いはないと思うけどな。碓氷は厳密に言えば長野との県境だし…関東に入れなくて良いんだろう?』

冗談を言いつつも今後の転戦の順番などを決めていく。一応相手の前情報を基にレベルを徐々に上げていく方向で検討を進める。

そうすると奇しくも神奈川が最終という事になった。ある意味神奈川は自分で言うのもなんだけどそこそこレベルは高い方にあるんじゃないかとは思う。

ただ…このプロジェクトDの2人もなかなか育ってきていると思うのは確かで。

うかうかしてたら自分だってヤバいのに…神奈川に今居ないからって言うのもあるけど、名前の挙がってる奴等って…圧倒的に俺の世代より年下なんだろうと思う。

知らない名前ばっかりだしね。

神奈川はかなり早めに偵察に行かなくちゃいけないかなって高橋　涼介の言葉を聞きながら思ってたりする。

1時間ほど話し込んで高橋　涼介に交通費のレシートの束を渡しその倍以上の額をよこしてきた。おつりは今後の交通費の足しにしてくれだって^　^;;;;キザだねえ…

まあ、ありがたくいただいて店を後にする。高橋　涼介の行動も探りを入れておかないとな…美奈子に手を出されたりしてもちょっと困るし…とかいろいろ思案しながら戻っていった。

さて…プロジェクトD始動して快進撃は続く…ので、ここらで1発、サプライズを仕掛けるとしますかねぇ…。

蒸し暑くなってきて朝晩との気温差が体力的にどう影響出るか…特に拓海は普段トラックドライバーをしている。目や肩、腰に相当な疲労を抱えてるに違いない。

取り敢えず自分が早番で拓海も早上がりの日を狙って…スタンドのお客さんでもある整体屋の先生のところに連れて行く。

拓海「さつきさん…別に俺はいいっすよぉ～」

さつき『センセー悪いトコは気にせずガンガンやっちゃってください！』

拓海「ちょ、ひどっ！ギャアアアアアア！」

さつき『悪い所はしっかりメンテしとかないと！それは高橋　涼介からも言われてる事だしな。（※大嘘。言われちゃいないけど、体が資本…これ位しかサポートできねぇ

し…悪く思うなよ。）』
拓海「いでぇええぇ!!センセ!そこっ!やっべぇえ!そこは何!!!シャレになんねぇ～っすよおお!!」
センセー「あぁ…ここは胃腸だろ…で、ここが肩と目の関係で…」
拓海「うぉおおおお!!!ひぃいいい!!痛ってえぇ!!!やめてっ…くっぐはっ!死ぬ～!!」
センセー「肩甲骨の周りの筋肉がゴリゴリじゃねぇか!何でこんなになるまで放っておいた?」

施術の間…一旦外に出て一応高橋　涼介に電話。

さつき『あ、もしもし～高橋　涼介さんの携帯でよろしかったですかねえ?毎度お世話になってますぅ。○○エネルギー渋川ＳＳの小長井ですけども…』
高橋　涼介「何だよ?よそよそしいな…職場からか?」
さつき『うへへっまあ…半分は仕事みたいなもんかな。今、拓海を連れて整体屋に来ててさ…あいつ仕事がトラック運転手だろ?目、肩、腰を酷使するじゃん?で、プロジェクトＤに影響が出たらヤバいと思ってね。スタンドのお客さんの所の割引券貰ったもんでさ。ゴリゴリやってもらってる所さ。

ただ、お宅の弟にもしてもらわなきゃとは思うが…
予定が解らないからな？割引券持って行くから好きな時に受けてもらってくれよ。
あくまでも俺は公平に見てるつもりだからな。
拓海だけに肩入れすることはしないから。それを伝えたくてな。』
高橋　涼介「そっか。ま、そう言う事なら俺も反論は無いしな。ドライバーへの負担がこれからますます大きくなる…費用は俺が持つから。今度会ったときに渡すさ。了解、じゃ割引券サンキューな。」
(ピッ…)電話を終えて治療院に戻るとさんざん騒いでグッタリとした拓海が抜け殻のように座っていた。
さつき『センセーありがとうございました。これでバッチリ良くなりますよね？』
サプライズのついでに…???　(マジか！嘘だろぉおおおおおおおおおおおおおお～!!!勘弁してくれぇ～!!!)
センセー「じゃあ次は副店長行ってみようかぁ～！」
さつき『センセ？ちょっと待って今日1人分しかお金持ってないし、俺はまた別の日に来るからさぁあああ！』
センセー「いやぁ、今日はお客さん連れてきてくれたしサビス、サビスゥ～(^ ^♪」
さつき『んなアホな！フィリピンパブのお姉さんみたいな言い方せんでも！うっそ！

いっででっ！いっでっ！いっっでええええええ!!マジでやべぇ!!!!ひいいい～!!』

拓海「センセー！さつきさんもお疲れみたいなんで思いっきり疲れの元を取っ払っちゃってくだ～い！」

さつき『マジか！拓海!!!おまえってやつわぁあああああ!!』

拓海「何て仲間思いなんでしょw俺が苦しんだ分、苦しんでくださいね^^」

さつき『マジこれ痛ってええ！センセ！ここ何よ！イタタタタタ!!!』

センセー「ここ？ここか？腎臓と肝臓だな…普段から冷たい物を飲んでるのと、客が来てトイレ我慢しすぎてないか？」

さつき『あ〃あ〃あ〃あ〃あ〃!!!!うっはあああ!!!痛ってええええええええ!!!!!ギブギブギブ!!!!』

★思わぬ逆襲に遭い…疲れを取りに行ったのか逆に貰っちゃったのかわからない位で…帰宅。（チ～ン）

美奈子「お帰り…って何？メッチャ疲れてない？」

さつき『おおぅ…今日さあ…プロジェクトDの方で連戦が続いてるじゃん？だからと思って気を利かせて拓海を連れてスタンドのお客さんのやってる整体屋に連れてってメンテナンスしてもらったんだよ。割引券貰ったのもあってさ。そしたら…1人分しか金持ってなかったのに俺まで巻添え食らっちゃって…ゴリゴリやられちゃってさ…

元々４６…もう４７になる人にはめっちゃ堪えたわぁ…』

美奈子「あ、そんな割引券あったん？そしたらあたしと沙雪と真子ちゃんの３人で行ってみるかなあ…あたしも首と肩がひどいんだよね…。」

さつき『なになに？お前Ｍなん？めっちゃ痛いし、こんな状態になるぞ？良いのか？』

美奈子「でも、翌朝にはスッキリしてそ～じゃん？」

さつき『そりゃ、そ～かも知れんけども…』

美奈子「じゃ割引券３枚よろ～♪」

さつき『はいよ。後悔しても俺は責任取らないからな。』

美奈子「Ｔｈａｎｋｓ！」

そう言い残して自室に消えていく美奈子。ソッコーで沙雪に電話をかけてる。

美奈子「あ、沙雪？あたし、美奈子だけど…今、さつきから割引券貰ったから真子ちゃんも誘って整体に行かない？最近疲れてるじゃん？あたし達。」

沙雪「へ～整体ねえ…身体が歪んでるとお肌の具合とかダイエットにも影響あるとか聞くよねぇ…」

美奈子「でしょでしょ？女子力上げておけば相手が見つかった時にもアタフタしなく

て済むし…それに、沙雪はさっきとお付き合いしてるんだから、そういうの大事だと思うよ？」

沙雪「ん～じゃあ、とにかく真子にも聞いてみるわ。今夜返事できるかどうか解んないけど良い？」

美奈子「ああ…割引券の有効期限はまだ3か月くらいあるから急がなくても良いからね。」

沙雪「オッケ～wじゃあ連絡しとくね。」

そしてこの後に真子ちゃんに連絡を取ったら、

真子「へえ…整体ねえ。確かに体が痛い時あるし…受けてみようかなあ？」

という前向きな回答に3人で一緒に行くって事で、週末3人で治療院を訪れ…

しっかり施術してもらった。（でも、拓海やさつきほど大騒ぎにはならず、むしろイタ気持ち良い位でドリフトのキレも良くなったとか…）

（注…あくまでも個人の感想が含まれています^　;;;;）

整体は良いけど…でも、その後にタピオカミルクティー飲んじゃダメじゃね？って突っ込む余地がありませんでした…（さつき&池谷注。）

口コミとガソリンスタンドで配る割引券の効果もあってか…整体院に通う人も増え、

センセーには充分感謝され、高橋　啓介から連絡があった時にも施術をお願いしま

すってしっかり根回ししておきました。（※後日、高橋家に割引券を１０枚ほど郵送で送っておきました。高橋　啓介も絶叫したそうです。）

そして数日経って…さつきが群馬に来て２度目の夏を迎え、相変わらずスタンドには常連さんがいっぱい^　^　;;;

まあ嬉しい事なんだけど、時々収拾がつかなくなる時が…。

今日のメンバー店員ｓｉｄｅ…

店長（遅番）、池谷（珍しく配達と集金日が重なって中番）、樹（↑休みなのになぜか私服でいると言う…暇人か?^　^　;;;）、さつき（バイトの手配が付かず遅番）

客ｓｉｄｅ…健二、沙雪、真子ちゃん、美奈子、拓海（↑会社のトラックの給油に寄ったら皆が居たパターン）

店長「何だぁ?今日はまた、すごいメンツが揃ったもんだなあ?」

さつき『これだけ揃うとカオスを通り越して収拾付かなくなりますよね^　^　;;;』

池谷「店長…これじゃ他のお客さん入ってこれないから…とりあえず片付けちゃいますね?お～い、樹!付き合えよ。」

樹「もちろんっすよぉ。」

さつき『じゃ、俺、メーターとタンク残量取っちゃうね。』
拓海「あ…じゃ、俺ゴミでも片しますね…」
店長「お前さんは良いんじゃないのか？まあ…3年間バイトし続けた習性ってやつなんだろうけども…」

店員組はテキパキと行動…健二も取り敢えずテーブルとか拭き始める…
女子チームはソファに座って整体の帰りに寄った美奈子行きつけのタピオカミルクティーが絶品だったとか…あそこのパンケーキはおいしいだのとｓｗｅｅｔｓの話題で夢中になっている…
一方、水道の脇では洗った空き缶用のゴミ箱を片付けながら樹と拓海が話してる。
樹「それで…プロジェクトＤの方はどうなんだ？ここんとこ毎週末連戦だろ？仕事しながらだと厳しいよなあ？」
拓海「まあ…正直、週の中頃が1番厳しいかなぁ。土日の疲れが月曜と火曜の仕事で増幅されて…水曜と木曜は惰性で何とか仕事をこなしてる…で、金曜の夜から走りこみ、土曜の夜に交流戦。交流戦の後、日曜の早朝までにタイムアタックまで終わらせて朝飯食って撤収…ってパターンが多いしなぁ。あ、この前…さつきさんに、ここのお客さんの整体のセンセーのとこ連れていかれて…ゴリゴリやられた^　；；；」

樹「そっかぁ～。無理してるからやられたらすげぇ痛かったんじゃね～の？」
拓海「そりゃ、もう…痛いとかの比じゃ無ぇ～って。逆に痛みがジンジン残ったまま家に帰って…でも起きたらすっきりしてたけどな。」
樹「それじゃあ…一応効果はあったんだ？」との問いに…

拓海「ん～、効果はあったけど施術中の痛さを考えるとさ…よっぽどの事が無い限り、自分から足を向けることはないと思うなぁ。」
樹「そんなに痛いんだ…でも、さつきさんもお前の事を気にかけてるからじゃね～の？」
拓海「まあな。高橋　涼介さんとさつきさんで相談して決めたらしい。そう言えば、最近　啓介さんも受けに行くんだか行ったんだかって聞いたぜ…」
樹「そりゃ、それでヒィ～ヒィ～言ってる高橋　啓介の姿も見てみたい気はするけどなぁ…ウヒヒっ。」
拓海「お前…性格悪いぞ？他人の不幸を喜ぶなんて…ま、とばっちりでさつきさんも受ける事になって悶絶してるのを見て笑ってた俺も同じだけど…な。」
樹「何だよ…お前だって俺の事言えないじゃん。」
拓海「ま、そ～ゆ～ことだ。あはははｗ」

こんな話をしながら片づけを終えて中に入ってきた2人。

樹「店長～外の片づけとゴミ捨て終わりましたぁ。」

店長「おう、お疲れさん。缶コーヒーで悪いけど飲んでくれよ^ ^」

樹、拓海「「あざ～っす!!」」

池谷「店長～、こっちも洗車機の洗剤類の補充とノズルのエア・パージ、それに操作盤のロックと電源ＯＦＦ確認しました。」

さつき『こっちもタンクの在庫量とメーターの記入終了です。お疲れ様です。』

店長「お～、2人ともおつかれ～！缶コーヒーでも飲んで休憩してくれ。俺は日報まとめちゃうから。」

さつき、池谷『「了解です^ ^」』

健二「一応、雑巾がけと水撒きも終わったぜ～」

さつき『お、健二君、ありがとね。これでも飲んでよ。は～い。』

良く健二の飲んでるオレンジジュースを渡す。

健二「うっほ～、さつきさん解ってるぅ～ありがたくいただきま～す。」

さつき『あ、お金は店長から出てるから店長にお礼言っといてね^ ^』

※この後…みんなでちょっとした食事会に出かけ…なんだかんだでこの世界のの人達と仲良くできてる。

良い人達だから…もう離れらんないな…とさつきは思っていた。

それは同時に美奈子も思ってるようだったけど…また折に触れて書きます。

夏の終わり…

息抜きに伊香保の日帰り温泉に入浴中…

さつき『あっちいけど、やっぱ温泉は良いなぁ。』

ポツリと呟きながらチャポ…っと水音を立てて湯船から上がって脱衣所の扇風機で頭と体を冷やし、駐車場に出てくると…スーツとＳ１５の横に着く黒のＳ１３。

さつき「ん？美奈子…何でここに？仕事はよ？」

美奈子「あたしだって疲れるんだって^^　;;;;」

沙雪「そしてあたしももちろん居ると…」

さつき『ホント、仲が良いよなぁ』

ついでにここに来たなら…という事で２人も入浴に行ったので、

俺は伊香保神社でプロジェクトＤの成功を祈願しつつ…帰り道に温泉まんじゅうを買って車で食いながら待つ事に…携帯で天気とか渋滞情報を見ながら時間をつぶす。

沙雪と美奈子が出てくる…そしてこの後・・・２台で向かったのは秋名山。ホントはもっと遠出したかったけど時間も時間でどうにもできないので近場で遊ぶことに…

頂上に向かう道路で…見た事のあるインプレッサの2ドアＷＲＸを発見…拓海の親父さんか？

拓海とはまた違った走り方で一瞬面喰ったが…俺も美奈子も食らい付いている…で止まってくれるのかな？今ので７０～８０％位かな…全開だったら置いて行かれてるかもな^　；；；

お、降りてきた。やっぱり藤原文太…その人ですなあ。

文太「よぉ、あんたもしかしてＧＳの人かい？」

さつき『そ～です、そ～です。最近副店長になりました小長井さつきと言います。えっと…拓海君のお父さんですよねぇ？』

文太「おお、やっぱりな。いつも息子がお世話になっちゃってねえ。藤原文太と言います、よろしく。シルビア系に乗ってる連中で俺にくっついて来るのが殆ど居ないもんでねえ？」

さつき『あはは^　；；；そうですか？あ、後ろのＳ１３から出てきたのが俺の従妹で小長井美奈子と言います。一応群馬に来るまで地元の神奈川で走ってました。縁があってこっちに来てから１年半位ですかねえ…池谷君達とつるんでます。』

文太「それに…高橋　涼介とかも含めてプロジェクトＤって～のもやってるんだろう

？」

さつき『あぁ…俺はあっちも秋名スピードスターズに関しても裏方です^^;;;;』

文太「その割にはずいぶん熱心にいろんな所に走りに行ってるじゃね～か？」

さつき「敵陣視察みたいな事はもちろんしてますよ。コースの下見をしてより的確にドライバーにアドバイスできればって…まあ、俺が直接言わないで高橋　涼介に言ってもらう様にしてますけどね。」

文太「ふむふむ。そりゃあ…何かの意図があってやってるのかい？自分で前に出ずに高橋　涼介を前に出すって言うのは…。」

さつき『いやぁ、至極簡単な事ですよ。高橋　涼介の方が語彙力があるので誤解無くドライバー2人に伝わりやすいって事と俺の存在は極秘なんですよ^^;;;;影武者って言うか…忍者みたいなもんですね。』

文太「って事はだ…2人のうちどっちか、または両方に何か車とか本人がトラブルに巻き込まれたって時にここぞとばかりに相手が日程調整を拒むことだってある…

俺らの時代にもよくあった事だがな…その時に初めて出て来るって事なんじゃね～のかい？」

さつき『メッチャクチャ鋭いっすね^^;;;;あくまでも俺は実力的には劣ってる所もあるでしょうけどね…あの2人よりちょこっと長く生きてる分、何か爪痕を残す事位

はできるんじゃないかって思いましてね。』

文太「イヤイヤ、謙遜しなくたって解る…多分俺から見て…そっちのお嬢ちゃんも含めての話になるが、おたくら2人はうちの息子や高橋　啓介よりも実力が上だと思うぞ？神奈川で…何か通称みたいなもの…付けられてなかったか？」

さつき『ん～まあ…車の色からでしょうけど〝銀色のなんちゃら〟とか…言われてたみたいですよ？（↑できるだけ核心には触れない）』

文太「そうか…なるほどねぇ。でも…俺の時代にも似てる名前を呼ばれてる神奈川の走り屋が居たなぁ。〝銀色の悪魔〟と〝漆黒の闇に浮かぶ銀色の幽霊（ゴースト）〟って言ってな。」

美奈子も聞こえたのだろう、下を向いて沙雪と何やら話をしている。俺は…この場をどう乗り切ろうか思案してるが、動揺はなるべく顔に出さないようにしてる。（もしかしたら店長とかに聞いてるんじゃなかろうか…とか深読みしだしてるさつき。）

文太「ま、ちょうど良いや。ちょっとここの下り…付き合ってみないか？足回りを変えたんでテスト…と思ってたんだけどな。試しに乗って意見を聞きたくてな。」

さつき『ああ…そう言う事でしたら…喜んでテストドライバーさせていただきますよ^^あ、美奈子～！悪いけどそのＳ１３ここにおいてお前さんＳ１５で先行して。俺、ちょっとインプレッサ運転させてもらうから』

美奈子「え？あ、そうなの？じゃあ…Ｓ１３をそっちの端っこに停めて来るわ。」
スピンターンして一気にバックしてピッタリ端っこギリギリにつけてくる美奈子
文太「良いウデしてるなあ。あれが〝漆黒の闇に浮かぶ幽霊（ゴースト）〟の走りか…（ボソッ）」
（はいっ？素性…バレバレっすかね!?やめてくれよぉおおお…心臓に悪いってばぁ…生きた心地しね～し！^　^　;;;;）
さつき心の声『（ヲイヲイ、おっちゃん、一気に核心を突くなってば！どうしてここの世界にゃ爆弾を炸裂させるやつが多いんだか…^　^　;;;;シャレになんね～事をサラッと…）』
俺は文太の言った事を聞こえなかった振りでインプレッサの運転席に座った。
さつき『いやぁ～やっぱこのエンジン音といい、回転の上がり具合といいメッチャ…独特。えっとじゃあ…グリップで行って１往復してから攻め込んで行く感じで良いでしょうか？』
文太「いや、小手調べは置いといて自分の腕を信じて一気に行ってみてくれないか？」
さつき『うわぉ！そうですか…じゃああ…まあコースは頭に入ってるんでギリの境界線を狙ってみますね。』（美奈子に目配せをして沙雪にタイムを計るように指示。）
先行後追い方式でＳ１５が出るのとほぼ同時にアクセルを踏み込む。

ギアのつながりがドンピシャ。思わず1コーナーを曲がってる最中に

さつき『へぇ～セッティングでこんなに違うんだなあ…4駆って感じが全くしない。こりゃ速いFRって言っても言い過ぎじゃないや…（ポツリ）』と呟いたのを聞き逃していない文太。

コクコク頷いてる。なら〝FRっぽいライン取りができる〟と踏んで思いっきりS15の時と同じラインにシフトする。

するとこの読みが当たり、流すコーナーも流さないコーナーも溝落としもハナッから面白いように決まる。

さつき『え？4駆って言うのをマジで忘れるなぁ。完全にFRのラインで走ってるのに全く無理な感じがしない…ランエボだったら絶対こんなラインでなんて走れない…。』

前を走ってる美奈子とジリジリ距離が詰まっていく。でもこれは美奈子が遅いわけじゃない。（この車がモンスターなんだ…すげぇモン作って来るなぁ。）

心底このおっちゃんの底力に驚いてしまう。（ってか設定じゃ42、3だから元の世界の俺の方が年上なんだけどね^　；；；）5連続ヘアピンを溝落としで抜けると感動して文太に言う。

さつき『そうですか…こりゃ、楽しいし拓海君を更に上に導いていく車なんですね。

正直４駆なんでしょう？って思ってる所があったんですけど、断言できますね。ある一定以上の腕を持ってるＦＲ使いを更に上に引き上げるって言うか…育てる車だってね。きっと今より２段階は上に行く気がします。』

正直な感想を言うと…

文太「初めてでこんなに乗れるとも思ってなかったんだが…〝銀色の悪魔〟に俺の意図は伝わったみたいだし、このセッティングで行ってみるか。」…え）

はい？って聞き返したくなる位いきなりなんちゅ～爆弾を落としてきやがるんだか。思わず絶句してしまった。イヤイヤ、この状況で受け身すら取れる訳ねぇ～じゃん^；；；

さつき『へっ!?何か物凄い事をサラっと…たった今、聞いた気がするんですけど？』

文太「まあ年齢が合わね～とは思ってたんだけどな…祐一から聞いてもしかしたらって思うようになってな…まあ通称の話は聞いてなかったんだがな。

あんたが〝銀色の悪魔〟ならあのお嬢ちゃんが〝漆黒の闇に浮かぶ銀色の幽霊（ゴースト）〟だろう？

それ位運転を見りゃわかる。あのお嬢ちゃんだって下手じゃねぇ。それどころか今の若造より全然懐の深さが違う。昨日今日走ってできる芸当じゃねぇ。」

さつき『はぁ…じゃあもう既に大体の事はご存じって事なんですね…俺とか美奈子の

事。』

文太「まぁ～いつの時代からここにやって来たのはわかんね～けども…運転を見て少しも鈍っちゃいねぇ…いや、むしろ俺が現役の頃に聞いた噂よりどんどん右肩上がりに進化してるような気がする。」

さつき『まあ…元々居たのが２０２０年で俺も美奈子も４６、７歳でしたからね…ホントならおっさんとおばさんですからねぇ。（笑）

この世界に来て急に２２ぐらいの頃に戻されたって…毎日乗ってないと勘も鈍って来るし不安でね^^；；；昔より慎重になった気がしますけどね。あ、ちなみに高橋涼介はこの事（＝２０２０年からやって来た事）を全然知りませんから…通り名を何となく聞いたことがある位の、ある種の都市伝説みたいな位の扱いでしたからね…』

文太「まあ、その高橋　涼介にも勝ったから一目置かれるようになったんだろう？あの男は若いがきちんと礼儀はわきまえてる様だからなぁ。ウチの拓海も含めて今後ともよろしくって事で。」

さつき『イヤイヤ、こちらこそ…いろいろとご指導・ご鞭撻の程よろしくお願いしますよ。』

文太さんとの初対面がこれって…今後どうなってくんでしょ^^；；；お見合いしてるんじゃないんだから…とか後になって自分でツッコミ入れてるし。

※何だか自分の与り知らない所で物語がどんどん形成されていくような気がした。（何か怖っ!!）そんな時に…タイミングが良いんだか悪いんだか解らんけども…

（※―ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅこころは　さつきｓｉｄｅ→Ｎｏ　ｓｉｄｅ（＝作者のナレーション目線）にて進行します―）

緊張の中…さつきと文太が会話してる所にカットインしてくる美奈子と沙雪。
まったくこの２人はタイミングが良いんだか悪いんだか^^;;;
美奈子「お～い!さつき!さっきのタイムこんな感じだってさ。」

文太「ん?タイム?今の下りの…計測してたんかい?」
沙雪「ええ。さつきから視線を感じたんで、取り敢えず測っておいた方が良いかなって^^;;;」
（ストップウォッチを文太とさつきの前に出す沙雪。）
さつき『ん～っと…どれどれ?おっ…この前高橋　涼介とバトルした日にベストタイム更新したタイムアタックの時と同タイム…で、美奈子が1秒遅れって事はバトルの時の俺のタイムか…良い感じじゃないですか?』

文太「2人とも初めて乗った車でこんなタイム出せるんだなぁ。正直驚いたぜ。」
さつき『この車の戦闘力はこれを見ても明らかですね。間違いなく第1級の戦闘力を持ってる良いマシンですよ。』
沙雪「ちょ、ちょっと待ってよ…2人共初めての車でいきなりこんな凄いタイム出ちゃうの？普通じゃありえないって…何なの？あたしにゃ、理解不能だわ^　;;;」
肩をすくめて両手を胸の横辺りで外側に広げリアクションを取る沙雪。

文太「まあ…常識に囚われてたら記録は伸びねぇ～っちゅーこったな。考えて考えて…それをホームコースで確かめて。10個考えたうちの9個ダメだったとしても1つ残ればそれが自分のスキルになる。テクニックなんてもんはそんなもんだ。その中の1つが…」
沙雪「溝落とし…ですか？」
文太「そう言う事だ。しかも秋名の溝の使い方は2通りある。…〝ツッコミでアンダーを出さない為のツッコミ重視の溝走り〟と〝コーナー出口での脱出速度を稼ぐ為の立ち上がり重視の溝走り〟があってな。どっちの技も入るタイミングも飛び出すタイミングも微妙に違うんだ…。こればっかりは練習しないと説明が難しいんだけどな。ま、この2人はどっちも出来てるみてぇ～だから恐れ入るがな。」

さつき『俺らの場合は…神奈川のヤビツ峠とか箱根の奥とか…使えそうな所が何カ所か存在してて実際に使って走ってたからこそ、ここで出来てるんですよ。いきなりやって出来てる訳じゃないですしね。』

美奈子「あたしはさつきの受け売りって言うか…最速のラインを見せて貰うとこれから通らなきゃいけないラインが見えてくるようになるんです…そこを通るにはどうするべきか…って事で溝落としをやり始めたんですけどね。」

ものすごく特殊な才能をサラッとぶっちゃける美奈子と…ウンウンそうだねぇ～と頷いてるさつき。↑あっさり言っちゃってるけど…実はものすごい事言ってるよ？（By作者）

〝そんな事があるのか!?〟呆然としてる文太と沙雪。追い打ちをかけるように美奈子の言葉が続く…。

美奈子「え？あたしだけなのかしら…その見えるラインにトレースする様に車の中心を合わせていくと…出来ちゃったって言うのが正直な所で…」

沙雪「あ…あたし、前に碓氷で拓海君とバトルした時…真子がオーバースピードで曲がり切れなくてスピンで逃げた時直後に居た拓海君が避けて横を抜けて行ったの…後で聞いた時に同じような事を言ってたわ。拓海君以外にもそういう人っているのね…」

文太「そりゃ、よっぽど集中力が高いのと…動物的勘ってヤツじゃねぇ～かな。感覚

が鋭いんだと思うぜ。要はホームでやってる事を他所でも同じようにやる…って言う事だからな。だからってそのラインが見えるって言うのは誰にでもできるってもんじゃないからなぁ。その感覚は大事にした方が良いぞ?そっかぁ。凄ぇ～事を聞いたもんだな…じゃ、また会おうぜぇ^^」

と言って文太はインプレッサに乗って去っていった。

そして3人でＳ15で頂上を目指し、Ｓ13を取ってきた後…ケーキが食べたいって事でバイパス沿いのの美奈子の居た店舗へ。

そして沙雪の権限で新作の〝プリンタルト〟を含めた数種類のケーキを無料で包んでもらうと言う暴君っぷりを発揮。（↑まかり通る事自体がものすごいと思うけど。アセアセ^　;;;）

その後合流した真子ちゃんと共に4人でケーキをおいしくいただいたんだけども…良いのかな?

（※―ここからはさつきｓｉｄｅで再び進行します―）

秋名の峠で文太のインプレッサと出会って10日ほど経って…

季節も秋に入り残暑の中にも朝晩過ごしやすくなってきた。
プロジェクトＤの遠征の方も、終盤戦に差し掛かって…東京に入れてるけど○○○峠（※ちなみに原作では○○○峠（ヒントは漢字３文字）って有名なのに出て来ないのは何でか…ある意味黒歴史だから敢えてＨＰに載せなかったんだってさ…^　^　;　;　;）
と神奈川２戦を残すだけになったその日…俺は早番で上がっていて、休みだった美奈子と沙雪、真子ちゃんの４人でたまにはプロジェクトＤの応援に行こうかという事になり…
（※実はその他に妙な胸騒ぎを覚えていたのもあったんだけど…変に心配させたくもないので周りに言ってないが。）
シルエイティの初代ＩｍｐａｃｔＢｌｕｅチーム（真子＆沙雪）とＳ１５の方に俺と美奈子という布陣で出発。八王子で高速を降りた時に俺の携帯に電話が。横に居た美奈子が電話に出る。

美奈子「はい、もしもし小長井さつきの携帯ですけども…」
高橋　涼介「ん？あ、あの…もしかして従妹のえっと美奈子さんですか？高橋　涼介です。今ってさつきは…運転中ですか？」
美奈子「あ、はい、今八王子で…これから○○○峠に向かおうとしてて…」

高橋　涼介「おお！助かった…じゃあ…あの、ちなみに今日車ってどれで来てますか？」

美奈子「(俺の顔を見てから)さつきのＳｌ５と…友達の初代ＩｍｐａｃｔＢｌｕｅの２人も誘ってるのでシルエイティで向かってますけど…」

さつき心の声『(何だろ…こっち見ながら話してるのがヒジョーに怖いんだけど^；；；　はっは～ん解ったぞ…何かあったな。緊急の代走要請だわこりゃ。)』

高橋　涼介「詳しくはこっちに着いてから話しますけど…さつきに代走を頼みたくてね。」

美奈子「あっ！え？そうなんですか？どっちを…へっ!?じゃ…２人ともトラブルに巻き込まれたんですか？」

さつき心の声『(あっそう…２人ともアウトですか…って事は食中毒か練習中に何か…妨害工作にでもあったのかな？どっちにしても気を引き締めて行かなきゃいけなさそうだな。あ～ぁ…やっぱりね。いつかこんな事があるかも知れないな…とは思ってたけどさ)』

高橋　涼介「…そうなんですよ２人とも出られなくなってしまってね。もしかするとさつきが往復するか…美奈子さん、貴女がどっちか走る…って事もあり得るかもしれませんので…美奈子さんも神奈川では有名な…〃　漆黒の闇に浮かぶ銀色の幽霊（ゴース

ト）〃ですもんね。」
　美奈子「はい？なっ、何でそんなこと…まさかさつきが？（こっちをチラチラ見ながら話してる…疑われてるのか？）」
　高橋　涼介「イヤイヤ、これは俺の勘ですよ。さつきが〃銀色の悪魔〃なら貴女が…ってね。」
　高橋　涼介との電話で固まってる美奈子…まさかバレてるなんて思ってなかったんだろうな…^　^　；；；
　高橋　涼介の声が運転してる俺の耳にもうっすら聞こえてくる。
　高橋　涼介「さつきのスタンドに入って行ったんで関係者だな…とは思ってたんだが、あんな派手にハイカム、ハイコンプ仕様のＳ１３をいきなりおもちゃのように使えるなんて…普通じゃありえない事だ。それにＮＯＴＥですら中身は全然別物だと思ってんだが…でも、そのもともとアンダーパワーなＮＯＴＥがやってる事と言えば足廻りとマフラーとＣＰＵだけ。せいぜい１２０～１３０ＰＳも出てれば良い方だろう。そんな車でその辺の走り屋連中より速いとなると、ウデが飛びぬけていると考えるのが普通だ。
　それだけのウデを持っているなら神奈川でも相当有名だったんだろうと…ね。〃銀色の悪魔〃の関係者…でウデが相当ある…もう〃漆黒の闇に浮かぶ銀色の幽霊（ゴース

ト）〃しか頭の中に選択肢が浮かばなくてね。しかもこの仮定が全ての要素を結びつけて辻褄が合ってしまう…違いますか？」

美奈子はグウの音も出ずに瞳孔が開ききって心臓の音がバクバク聞こえてきそうな状態…

見かねたさつきがスピーカーにして助け船を出した。

さつき『はいはい、お電話代わりましたよ。な～に女の子をいじめてるのかなぁ？傍から聞いてると…お前さんの言い方はあまりにも理路整然とし過ぎてて警察の職務質問みたいだぞ？』

高橋　涼介「いや、そんなつもりは無かったんだが…すまん。それだけこっちも緊迫した状態って事さ。美奈子さんにも謝っといてくれよ。」

さつき『いや、スピーカーホンだから聞こえてるだろ？直接謝った方が良いと思うぞ？』

美奈子「いや別に…ちょっと驚いちゃっただけど…そこまで謝罪がどうのとか言って無いし^　;;;」

高橋　涼介「そうですか。それなら良かった。お詫びに今度高崎で見つけた極上スィーツご馳走しますよ。」

美奈子「あたしってモノで釣れると思われてるのかなぁ…結構その辺はしっかりして

るよ？」

高橋　涼介「イヤイヤイヤ…参ったな。そんなつもりでは決してないですよ？」

美奈子「フフフ…冗談ですよ。ま、今度そのスィーツ紹介してくださいな。ま、あと２０分くらいで到着すると思いますから…」

高橋　涼介「解りました。では後程。さつき！峠の入り口辺りに怪しいのが居たら気を付けてくれな…」

さつき『はいよ、了解。あ、美奈子、沙雪に連絡してこの事伝えて。』

美奈子「りょ～かいです。」

（※――――ここからはｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅさつき→Ｎｏｓｉｄｅ（作者ナレーション）で進行します――――）

美奈子は沙雪に取り敢えず高橋　涼介から伝えられたプロジェクトＤのＷエースが妨害に遭ったのか他の要因かはわからないけど、とにかく今ピンチらしい事と、もしかしたら車借りて上りか下り…どっちか相手にしなきゃいけなくなるかもしれない事と…下の辺りに厄介な連中が潜んでるかもしれない事などを伝えている…。

沙雪も真子ちゃんも気を引き締めて向かうようだ。
さつき『さて…もうそろそろかな…さっきから変な胸騒ぎがするんだよね…。』
美奈子「え〟っ…マジで？あんたの予感…ほぼ１００％で当たるヤツじゃん…」
さつき『実はここに出かける時…もう予感してた。』
美奈子「はぁ～…何でそう言う事初めに言っておかないかなぁ…」

やがて峠らしい道に変わっていく…ちょっと走るとオイルが撒かれたのを洗剤で洗ったような真新しいシミがあちこちにできている…事態は思ってたより緊迫してた^^;;;

さつき『たぶんエンジンオイルとかの廃油でも撒かれて滑って事故ったんだろうな…あいつらは運転が下手ではないからギリギリ本人は掠り傷で済む程度かもしれないが…車のダメージが心配だなぁ。』
美奈子「完全に潰しに来てるね…プロジェクトDを。予定変更しようとすれば逃げたってワーワー言うんだよ…そういうヤツらって。」
いつになく美奈子の怒りと沸き上がる様な闘志がメラメラと燃えてるのがありありと解る。

多分この〝殺気〟にも似たピリピリした空気…ＩｍｐａｃｔＢｌｕｅの２人やそこかしこに隠れてると思われる妨害部隊にもヒシヒシと伝わってるんじゃなかろうか…。

ま、ぼちぼち俺も殺気ＭＡＸで行ってみようかな…〝銀色の悪魔〟の名前の由来…こいつらに叩き込んでやろうかな…っと。

路面の感触を確かめつつ左右に道幅いっぱいに車体を揺すってレース直前のタイヤを暖めるウォームアップさながらに上って路面の状態を確かめる。コースは頭に入ってるので路面状況を追加すれば俺のデータは出来上がる。

真子「ん!?凄いね…」

沙雪「どしたの？」

真子「沙雪には伝わらない？あの２人…マジで怒ってるよ。本気でここの地元の連中…叩き潰すつもりだわ。さっきさんが往復出るって言っても…美奈子どっちかやるって聞かないと思う。

そしたら…沙雪、美奈子に無条件で車貸してあげて。美奈子ならこの車を絶対壊す事は無いよ。凄い…これが〝悪魔〟と〝幽霊〟のマジな闘気。痛い位ビリビリ来るよ…」

超・マジモード…暗殺者（アサシン）ばりの殺気全面開放!!

さつきと美奈子の殺気漲る闘気を解放した事で感じ取ったのは真子だけじゃなく…峠に居る妨害工作の連中すべてが首にナイフでも突きつけられたような感覚で…背筋がゾクゾクして身体がこわばり身動きが出来ない。〝下手に動けば皆殺し〟…それ位の殺気が峠全体を包み込んだ。

相手チームの妨害部隊の連中「「な、何なんだ…こいつらが走っていくだけなのに…ちょっとでも体を動かそうとすれば首を掻っ捌いて殺される気がする!!マジでヤベぇ!怖ぇえええっ!!」」

そしてこの異様な空気を頂上に居る高橋　涼介やドライバー2人にメカニックの連中、サポートの連中に至るまで感じ取っていた。

高橋　啓介「あ、兄貴…この空気…どう考えてもヤバくないか?マジでここの峠の連中木っ端微塵に吹き飛びそうな勢いを感じるぜぇ?」

拓海「この異様な殺気に似た空気に…山が全力で反応してるみたいな…何なんだこれ…」

高橋　涼介「すげぇな…これほどのプレッシャーは今までに感じた事が無い…これがマジもマジ…全力を解放した悪魔と幽霊（ゴースト）の闘気…俺が相手ならビビッて出て来れないかも知れないな。」

高橋　啓介「じょ、冗談だろ？兄貴がビビッて走りたくなくなるなんて…」

高橋　涼介「俺でもいささか気が引けるくらいの圧を感じるぞ。きっと…並の精神の奴らじゃ耐えられずに廃人に追い込まれるぞ。呆気無くこの勝負はカタが付く…しかも完膚無きまでに…相手が立ち上がれない位の精神的なダメージをもたらしてな…」

ボボボボボ…ボゥアアアアアア!!!フバンッ！ギュキャキャッ！キョォオオオ～～～!!

頂上まで上ると…高橋　涼介達の集合してこっちを見てるのが解る。さつきは運転席側の窓を開ける。

さつき『お待たせ。喧嘩売られたんだな？その売られた喧嘩…俺が買ってやるよ。どこの大馬鹿だ？ちょっとお仕置きが必要らしいな。（ニヤリ）』

美奈子「電話貰うまで応援に行く事しか考えてなかったんですけど、悪魔と幽霊（ゴースト）を敵に回したらどうなるか…見せつけるのも良いかも知れませんねぇ…フフフ。（真っ黒い笑みを浮かべる）」

真子、沙雪、高橋　涼介、高橋　啓介、拓海「「「「ま、マジでこの２人敵に回したくないわ／敵に回したら…命の保証は無い。／これほどだとは…傍に居ると更に凄みを感じる！ゾクゾクする程の闘気だな／こいつは…マジで地雷だ／やべぇ…これこそ悪魔の微笑み。その先に待ってる物は地獄絵図。」」」」

※プロジェクトＤの他のメンバーも同じ事を思っていた様子。

事故の様子を聞いてみると…片側２車線あるこの峠…昼間は結構車の往来も多い。

夕方日が沈むと急速に暗くなるこの街灯もない峠道。

そこにドラム缶に入っていたと思われる廃油（洗浄してる印象はエンジンオイルより硬いオイルだったと言うからデフとか機械油の９０とか１２０と言われる船舶とかダンプとかで使う様な固いものだろう）を何本か転がしてあったのに乗り上げたタンクローリーが横転つぶれたドラム缶から流れ出た廃油にタンクローリーが積んでいた重油が流れ、

しばらく後を走っていた高橋　啓介がまずスピンしながらタンクローリーに突っ込み、

それを避けようとした拓海。ハンドルを切ってもスピンしながら崖に突っ込み大破したという…その後、警察や消防などが出ても警察すらスピンして事故になった。
そんな大騒ぎがあったせいでバトルどころか練習すらできる状態ではなくなってしまったという。
そう言えば迫り来る崖の木々の一部がごっそり抜き取られて焼けた様な箇所があった。
ＦＤも８６もローダーで工場に運んでまだ部品が揃わず手付かずだと言う。
聞いていたさつきは…Ｓ１５を発車させ、美奈子を乗せたまま一気に見えなくなった。

高橋　啓介「あ、兄貴…あいつは一体…。」
高橋　涼介「この状況でも最速で走れるラインを美奈子さんに教えに行ったんだと思う。どっちを任されても大丈夫なように…な。きっとさつきが止めた所で美奈子さんの怒りが収まる事は無い。ならやらせてみようって事なんだろう。」
沙雪「いやでもそれって、この練習中にまた妨害があるかも知れないって事じゃ…」
高橋　涼介「あの２人の殺気にも似た闘気が妨害部隊を足止めするだろう…まるで首

元にナイフを突きつけられてるような殺気だからな。暗殺者（アサシン）ばりの殺気だよ…あれは。」

○○○峠にこだまする怒りの咆哮…ブォオオオオ!!ギュキャキャキャ!!グォオオオオオオオオオオ!!!ブゥアアアンッ!ギュキャキャッ!ギョリギョリッ!!!

1往復終えて帰ってきた2人…すぐさま美奈子は無言で沙雪のシルエイティに乗り換えそのままS15を追って消えていく。

高橋　啓介「こ、怖ぇえぇぞ…マジで、悪魔か阿修羅みてぇな顔してたぞ…無言で出て行く様も…本気のレーサーでもあんな殺気感じねぇだろ…」

真子「あたしは約1年レースやってるけど…あんな殺気は感じた事は無いわ。本当に恐ろしい。敵にしたくないわ…永久に。」

その後、5周位しただろうか…それだけで2人とも今すぐ行けると言う。

（集中力がハンパ無ぇ～この2人。）

5周したうち後半3週はほぼ全開でしかもタイムが揃ってる…高橋　涼介はタイムを見て驚き、拓海と弟を呼んでデータを見せる。

高橋　涼介「これを見てみろ…俺がよくタイムを揃える練習しろって言ってるのはこ

ういう感じだ。」

高橋　啓介「ん?ゲッ!なんじゃこりゃ…このタイムでしかも揃えるってタイヤの使い方どうなってんだ?」

拓海「えぇ!!!タイムアタックでもこんなタイム出せない位ハイレベルなタイムで揃えるってタイヤがタレてくるのも関係ないって…」

高橋　涼介「これだけ出来たらすごいだろうな。しかもさつきだけじゃなく、あの美奈子さんもだ。脱帽だよ、ここまでやられたら…な。」

沙雪&真子「すみません。あの…美奈子のタイムとかってどうなんでしょう?」

高橋　涼介「あの2人ともに言える事だが…ま、一言で言ってしまえば神業だな。3週目から5週目まで全開にしてるタイムが誤差1秒以内で揃ってるんだ。

（タイムアタックの記録をメモした紙を真子と沙雪の方に差し出す涼介と受け取ってしげしげと見入る真子と沙雪。）

沙雪&真子「ええっ!?誤差1秒以内…ですか?信じらんない…そんなに正確にできるものなんですね…」

2台で奥に停めて何やら話してる姿を見ながら5人（高橋　涼介、啓介、拓海、沙雪、真子）の〝ははは…〟と信じられないと言った感じの乾いた笑いが漏れた。

※一方奥で話してる２人の会話をお聞きください…

美奈子「あの下りの４つ目の右コーナー抜けた時にちょこっと苦し気なラインになるのってやっぱりオイルの影響を考えて？」

さつき『ああ…ホントならあと３０Ｃｍ外側を狙いたいところだけどな…あれ以上外側はまだ見た感じダメだろうな。４つ目でオイルが付いたらそこから先のペースが上げられない。それならコーナー１つを犠牲にしても他でペースを上げた方が良いと思うぞ。逆に上りのスタートして３つ目のコーナーを抜けてストレートに入る瞬間のくぼみ…ここにも注意だぞ。速度が出てる分、足回りが折れる可能性とタイヤがバーストする可能性がある。』

美奈子「了解。とりあえず、あと気にしなきゃいけないのは殺気にも負けずに妨害工作をかけてきたときの対処…だよね。かなり厄介だよね。ただ崖の上からドラム缶を落として来るか、」石か岩とかを飛ばしてくるか…火炎瓶で焼き討ちか釘とかでパンクを狙ってくるか…相手の車からオイル缶投げつけられたらアウトだし…」

さつき『ま、そこまで行っちゃうとＭＡＸの殺気を放しつつ…警戒していく事だろうな。今回のミッションは勝つだけじゃない。完膚無きまでに叩き潰すだからな…。』

戻ってきてまだ時間があるので…軽くＳ１５とシルエイティをプロジェクトＤのメカニックの人に見てもらいながら飲み物を飲んで待っていた。
美奈子は真子＆沙雪と何やら話していた。

高橋　涼介「ん？もう１０分前なのに一向に現れる気配が無いな。」
高橋　啓介「兄貴…もしかしてあの２人の殺気で逃げだしたのか？」
拓海「何か…いやな胸騒ぎがしますね。」
さつき『もし来なかったら俺たちに妨害工作や事故の責任を押し付ける気なのかもしれないぞ？サポート隊とメカニックはメンテが終わり次第撤収だな。』
高橋　涼介「俺は今回の妨害工作にあった事をＨＰに乗せる原稿を作ってあるんだが…今後こういう事態が逆に増えて行きそうでな…掲載するか悩んでいるんだ。」
さつき『なら逆に何も無かったかのように沈黙を通すのも手じゃないか？煽ってきた時に尻尾を掴んで芋蔓式に引っ張り出すって事にして。あ、妨害工作をこっちに追い被されないように、敵の妨害工作チームの動きと警察の動向…念のため探り入れた方が良いぞ。』
高橋　涼介「それはケンタとタイム計測チームに今、見させている。」

そんな話をしていると涼介にケンタから電話が…

ケンタ「あ、えっと涼介さんですか?こちらケンタですけど…どうやら妨害工作チームは崖の上から落とすドラム缶とかを置いたまま逃げだしたようですね。この分だと警察にタレコミの電話とかしてこっちに押し付けて来るかも。って事は警察が来るかも知れません。」

高橋　涼介「フッ…なるほどな。じゃあ…メカニック班と計測を含めたサポート班はドライバー2人と…ＩｍｐａｃｔＢｌｕｅの2人を含めて反対側から降りて向こう側にファミレスがあったはずだ。そこまで取り敢えず撤収してくれ。」

高橋　啓介「ちょっと待ってくれ…兄貴とさつきさんと美奈子さんはどうするんだ?下手したら逃げ遅れるんだぜ?」

高橋　涼介「俺は…このチームの指揮官だ。ギリギリまで居座るさ。」

さつき『それに、俺と美奈子は今回の代走要員だ。残るのは当たり前だろ?少なくとも警察に追い付かれるようなウデはしてないと思うがな?逃げる時には俺が乗せて来りゃ良いだろう?』

美奈子「少なくともさつきとあたしはさしずめ…〝プロジェクトＤの暗殺部隊（アサシン）〟だからねぇ…誰かさんに悪魔か阿修羅みたいって言われてたもんねえ?」

高橋　啓介「い、いや…その…すみません。でもそれ位に殺気立ってたもんで…言い過ぎました。」
美奈子「いや怒って無いから。神奈川に居た時から言われ続けてたことだしね…さっきの通り名の語源もここからだし。」

（※―ここからＮｏ　ｓｉｄｅ（＝第３者目線ｏｒ作者ナレーションとも言う）で進行します―）

取り敢えず現場にはさっきと美奈子、それに高橋　涼介だけが残り…涼介が相手側の代表者に電話をかける…（通話記録を保存するため録音機能をＯＮにしている。）
…鳴っているが出ない。数回繰り返すと電源が切れた。意図的電源をに切ったと見て良いだろう。
美奈子がその様子を動画で撮影し…証拠として残した上で俺達も撤収することに…。
その時ケンタから高橋　涼介に電話が掛かってきた。
ピリリリリリリｒ…ピッ…
高橋　涼介「ケンタか、どうした?」

ケンタ「今こっちは反対側に降りて来たんですけど…警察車両が７、８台そちらに向かって上がっていきました!!逆の方に降りて行ってください！」

高橋　涼介「わかった、ありがとな…。」ピッ…

高橋　涼介「…って言う事だから俺達も降りて行こうか。さつき、頼んだぜ。」

さつきと美奈子は頷いて２台で降りていく。さっきの最速ラインを使って…

高橋　涼介はその様子を観察している様にも見える。

下り切って反対側に降りて行ったメンバーと合流する為、若干遠くなるが住宅街を抜ける道を選択。

すると反対車線を凄い勢いで警察車両が走っていくのが見えた。間一髪とは正にこの事。

２０分後に待ち合わせのファミレスに到着し、ようやく合流できた。

ゆっくりしたい所だが、油断できないので美奈子は車を返却してそのまま、シルエイティの後部座席に座り、運転は真子にスイッチ。真子、沙雪、美奈子の仲良し３人組でシルエイティに、Ｓ１５に高橋　涼介とさつきがそのまま乗車。サポート隊はそれぞれワンボックスに乗り込み高崎を目指していく事に。地元でゆっくり飯でも…という事になった。

その間に高橋　涼介は手帳を取り出し、ノートＰＣの情報をメモしているようだ。

さつき心の声『（ん？メモ!?ああ…美奈子に教えると言ってたｓｗｅｅｔｓ情報かな。マメな男だねぇ…忘れてなかったんだ…）』

高橋　涼介「ん？何かしたか？」

さつき『今、手帳に書いてるそれ…もしかして美奈子に渡すｓｗｅｅｔｓの情報かと思ってね？忘れて無かったんだ…マメな事してるねぇ～って思ったのさ。』

高橋　涼介「まあな…今回はさつきだけじゃなく美奈子さんも引っ張り出してしまったからな…約束は果たさないといけないだろう？」

と言ってボールペンを走らせ住所やおすすめのメニュー、それに価格など書き込んでいるようだ。

高崎のこの前さつきと高橋　涼介が話したファミレスで朝食を食べ…美奈子に約束通りｓｗｅｅｔｓの情報とさつきに２人分の日当を渡した。

（※――――ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ　ここからはさつきｓｉｄｅで進めます――――）

高橋　涼介が渡してきた封筒の中身をこっそり見て驚いた。イヤイヤイヤ、２人分とは言えだよ…５万はさすがに多くね？

さつき『おいおいちょっと待て…いくらなんでも2人分でも額が多すぎねぇ～か？』

高橋　涼介「とりあえず急遽呼んだからな…緊急出動手当と、危険手当とが追加されてると思ってくれ。」

美奈子「へっ？…あ!!（さつきの慌てっぷりに封筒の中身を見て…驚いた）イヤイヤイヤ、それでも多いってば…今日1日って言っても実質2時間位だよ？いくらなんでも高額すぎません？」

高橋　涼介「俺からしたらそれ位…いや、ホントならもっと2人の価値はあると思っている…また何か緊急事態が勃発した時にはお願いしなくちゃいけなくなるんだ。イヤな役回りをさせる分上乗せは当たり前だろ？取っといてくれ。じゃないとこれから頼みにくくなる。」

さつき、美奈子『「いやあ…でも…良いのか？／良いの？ホントに？」』

高橋　涼介に押し切られる形で受け取る事になった。で、シルエイティを借りた分のガソリン代として今回の往復の分はここから出すことにした。

その後美奈子達はＧｅｔしたｓｗｅｅｔｓ情報を元に3人で行ってみる話をしている。

俺は拓海と高橋　啓介と車の修理の話をしていた。

さつき『それにしても2人とも…災難だったな。今回みたいな事はそうそうないとは思うけど、全く無い訳じゃないと思うからなぁ…気を引き締めて…って言ったって不可抗力ってもんがあるからなぁ。』

拓海「親父にグーで殴られる覚悟はできてるんですけどね…」

さつき『イヤイヤイヤ、今回の事は俺も一緒に行って話してやるって。これ以上身体にも心にもダメージ負う事無いと思うけど?それに…86もだけどFDだってあれって確か限定物だったろ?黄色のFDって…』

高橋　啓介「まあ…悔しいけど、今回は俺のウデのせいもあるしな。周りが見えてなかったって反省もある。」

さつき『まあ…例えレーサーでも事故はつきものだし…あんな妨害受けたら避けられないって言うのもあると思うぜ?俺がその場で巻き込まれて避けられたか…って聞かれたら避けられた自信は無いな。』

高橋　啓介、拓海「「さつきさん…それ、フォローになってねぇ～し!／なって無いっす…」」

さつき『それにしても…しばらく遠征が延期になっちゃったなぁ?秋も終わりになる

と箱根やヤビツも凍るぞ?地元だから良く解ってるつもりだから助言させてもらうけど…』
高橋　啓介「ウチの兄貴のタイムリミットも迫ってるしなぁ…年を跨ぐ訳にもいかねぇし。」
さつき『そ～言えば、おたくの兄ちゃんのリミットっていつまでだっけ?』
高橋　啓介「確か年明けたら卒論と国家試験が…とか言ってた気がするけどな…」
さつき『車が直って来るまで…普通に考えて2週間半～3週間位掛かるだろう…?9月終わって10月…2戦やるにゃ…セッティングもあるからなぁ…ホントにギリ間に合うかどうかだぞ^^；；；』
最悪、神奈川は暗殺部隊で行っちまうか?』
高橋　啓介、拓海「「そ、それじゃあ今までの苦労が…身も蓋もね～じゃんっ!／無いっすよぉ…」」
さつき『でも、修理の状況によってはそれもあり得るって事も覚悟しておかなきゃいけないぞ?』
高橋　啓介、拓海「「!!…そ、それは解ってるつもりだけどよぉ…／ここまで来て…何でこんな事になるんだか。」」
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

ここで解散となって後日改めて話し合う事になった。

数日後、いつもの仲良し３人組（真子、沙雪、美奈子）は高橋　涼介に教えられたｓｗｅｅｔｓのお店に顔を出していた…ここはケーキバイキングが人気のお店。

沙雪「で？白いＦＣの王子様のコメントは？」

美奈子「えっとねえ…（渡されたメモを開く）フルーツ系のタルトも甘さが上品でおいしい。でも、甘いものが好きならチョコレート系のガトーショコラやザッハトルテ、またはレアチーズとかずっしり重みのあるケーキも推せる…って書いてあるよ？」

真子「何だろ…お城での優雅なティータイムの絵が浮かんでしまうんだけど…フランス貴族とか…ベルバラ辺りの貴族の服装で…ダージリンティーか何か飲みながら談笑してる雰囲気だわ。」

沙雪、美奈子「「あぁ～納得。ああいう服装でお城の中に居ても…違和感感じないわ^；；；；」」

真子「じゃあ…あたしはフルーツタルト行ってみようかな…」

沙雪「真子がフルーツタルトならあたしはザッハトルテ行ってみるわ。」

美奈子「じゃ、あたしはレアチーズから攻めていきますか。」

９０分後…店から出てきた３人。

沙雪「う～ん、思いっきり堪能したわねぇ。」

真子「こ、今度…池谷さん連れて来ようかな。」

美奈子「そしたらさつきとかも連れて来るようじゃない？結構ああ見えてケーキ好きよ？」

沙雪「そ～なのよね。初めて碓氷をダーリンが走った日…普通にバイパス店で美奈子が休憩中だったけど…とか言ってチョコレートケーキとチーズケーキを笑顔で買ってたわよ？よっぽど好きよね…」

ケーキ屋を訪れる常連さんが…

最近いつも閉店間際にやってくる若い男性が居る。
パートのおばちゃん達から〝こんちゃん〟と呼ばれているこの若者はいつも決まってモンブランとチョコレートケーキをお買い上げして風のように去っていく。
パートのおばちゃん達に聞いてみると1か月以上、定休日以外は欠かさず毎日来ているのだと言う。
何でおばちゃんたちが彼を〝こんちゃんと呼んでいるのか…それは前に学生証を落として行って、名前が近藤勇一（こんどうゆういち）だから愛称として〝こんちゃん〟になったのだと言う…
聞くところによると群馬大学の4年生なんだとか。（そう言えば群馬大学ってどこかで聞いたことあるなぁ…って思ったら高橋涼介と同じ大学ね^　;;;）
なんか最近…あたしが接客すると挙動がおかしい…何か顔を真っ赤にして明らかにキョドっている…
理由はわからないけどことのほか急いで帰ってしまう…不思議だなぁ…と思ってあたしは去っていく後姿を見送っていた。

（ヲイヲイ、気が付いてやれよ。可哀想に…こんちゃんドンマイ^^；；；作者注。）

ある日、定休日以外毎日買いに来てた〃こんちゃん〃が来ない…と思ったら閉店間際に滑り込んできて…レジを閉める関係であたしが先に買って確保しておいたケーキを渡し…

息が整っていなかったので駅まで送る事に。

美奈子「こんちゃんって…家はどの辺なの？」

と走り出してすぐの信号に引っ掛かった時に聞いてみたら

こんちゃん「えっと・・・位置的には渋川と伊香保の境に近いんですけど、…伊香保の温泉街に向かうバス通り沿いにＥｓｓｏのガソリンスタンドがあるの解りますかねぇ？あの近くですけどね。」

美奈子「ん？伊香保の温泉街に向かうバス通り沿いのＥｓｓｏのスタンド…あ、それうちの従兄が務めてるとこじゃないかなあ？スタンドにどうせガソリン入れに行くし、そこまで乗せてっちゃうわね^^」

こんちゃん「えっ!?えっ!?そうなんですか？（意外な接点で驚いてる）ウチの親も親戚もあのスタンドでお世話になってるんですよ。」

美奈子「へぇ～そうなんだ^^じゃあ、うちの従兄とも話したことあるかもねえ？」

その言葉にハッとするこんちゃん…しかもスタンドに着いたら居ましたよ、こんちゃ

んの親戚が。何とこんちゃんの親戚はいつも池谷君と居る健二君だった。世間って狭いね^^;;;;

その後、あたしがＮＯＴＥとＳ１３を交換する直前に渋川駅前にオープンする事になった会社直営カフェの店長に抜擢された。

（その辺の件は３ｒｄ　Ｓｔａｇｅの〝それぞれの恋愛事情…４―４（ある意味これも…恋愛事情か!?）〟を参照してね^^;;;;）

（たぶん…と言うか絶対、沙雪のゴリ押しがあったのは容易に想像つくけど^^;;;;）

この前のケーキの味に感化されたのか、カフェで考案したケーキを店舗でも売るとか、

大胆な行動に出始めた。こんちゃんは当然のように店舗でモンブランを買うよりカフェで食べる様になり…

チョコレートケーキだけテイクアウトするようになった。それ以降、スタンドとかでもよく会うようになってこんちゃんも慣れてきたのが話しかけてくれるようになった。

まあ…お友達の増えるのは良い事だよね。うん。

（※補足…３ｒｄ　Ｓｔａｇｅでは恋愛エピソードを凝縮して書いちゃったので時間的な流れが解りにくいと思うので整理します。美奈子がまだ店舗で接客してる頃、こんちゃんと知り合う。↓　この後にレーサーの真子ちゃんの事故→手術・長期入院があっ

て…

プロジェクトＤが関東を制して解散してから３ｒｄ　Ｓｔａｇｅの河原でＢＢＱのお話につながっていきます。ちなみにＢＢＱの開催された頃は真子ちゃんが退院してからになりますので…翌年の春先になりますね。（ヲイヲイ、こんちゃん卒業式は？）って思われるかも知れませんが…卒論を提出し損ねてもう１年になってしまったと言う…

悲しいエピソードも付け加えておきます…（チ～ン。）

（※こんちゃんごめん！留年させちゃった大学５年生頑張ってね^　^　;…,読んでてつながらなくね？と思った方、そう言う流れですのでご理解ください。Ｂｙ　作者）

※ここではこんちゃんの美奈子に寄せる…ささやかな妄想を（※夢見る位許してあげてくれよぉ～って位の可愛い妄想を）ご覧ください。

（※――――ここからはＮｏ　ｓｉｄｅ（＝作者のナレーション目線）でお送りします――――）

ある日…翌日が定休日なのを知っていたこんちゃん…学校は午後からなのでまずはカフェで美奈子の入れてくれたアイスコーヒーとモンブランを堪能しつつ、もう1つのお目当てである

〝８０ｓのＰＯＰＳの流れる店内で働く美奈子〟を見て癒されてる…授業が終わってから帰りがけに久しぶりに元々美奈子が働いてたバイパス店の店舗に寄り道して、帰って楽しむ用にモンブランを2つと母親様にチョコレートケーキを買った。

パートのおばちゃん達には「あら？な～にぃ？こんちゃん最近全然顔を出さないから小長井さんを追いかけてカフェに行っちゃったって話してたのよぉ？」

などとはやし立てられ…オドオドしながら店を出る。１００％当たってる訳じゃないけどほぼ正解だから言い返すことができなかったこんちゃん…。

一応、作者が彼の為にフォローさせていただくと、今時珍しい位に純粋な子なんです。

家に帰るとお母さんにチョコレートケーキを渡し、自分はモンブランを皿に移してラップで包んで冷蔵庫に入れる。

部屋に入ると前に店舗に居た時に美奈子に頼んで一緒に撮ってもらった２ｓｈｏｔ写真を

カメラのキ〇ムラでプリントアウトして写真盾に入れて机の上に飾っている。

写真盾を見ながら…

美奈子さん「こんちゃん、ほら、これおいしいよ？あ～～～～ん♪ね？おいしいでしょう？」なんてにっこり微笑んでくれて…と頭の中でメルヘンチックな展開が再生されている…。

何かもう中学生の淡い初恋を見てるかのような…（コホンッ…何度も言いますけど、彼はそれだけ純粋なんです。）

卒業論文のネタと探すのに、ノートＰＣの電源を入れてネットを開くけど…ついつい美奈子の顔を思い浮かべて現実逃避してしまう…かなりの重傷かも知れない。

悶々としてるこんちゃん…最近は、ホント心ここに在らずって言うか…階段で躓いてコケちゃったり、電車で降りる駅を間違えて１つ前で降りちゃったり…学校祭の準備にも身が入らず、仲間たちからも心配されてしまう位…なのに美奈子を目の前にしてしまうと…

モジモジしてモンブランのケーキセットしか頼めない。

ほとんどビョーキのこんちゃんを健二君は心配して池谷君に相談していた。

健二「お～い、池谷…最近いとこのユーイチの様子がおかしいんだよ。」

池谷「え？あのこんちゃんが？どうおかしいんだよ？」

健二「何かさぁ…心ここに在らずって言うか…心をどっかに置き忘れちゃってるみたいな…行動と頭で考えてる事が違うって言うか…」

池谷「何だそりゃ？かなり重症な気がするな…恋煩いかな…健二、お前…心当たりは無いのかよ？」

健二「う～ん…全然見当がつかない…^　^　；；；大学に気になる子でも居るのかなぁ？」

樹「いやだなぁ。健二先輩、男はみんな女が好きなんですよ…フッ」

勘違いな男が登場…^　^　；；；

池谷「あのなぁ…樹、お前と違ってまだこんちゃんは純粋なんだよ…遠くから見て一方的に好きって…ポ～っとしてる…それだけでも良いって世界なんだよ^　^　；；；乙女チックって言うか中学生みたいって言うか…」

健二「うんうん、言えてる。小学生の書く絵日記の内容をそのまま大きくしちゃったような奴だからなあ…オシャレとかにも興味ないし。」

池谷「でも…一体こんちゃんを虜にしてる女の子って一体…誰なんだ？」

健二「それが解らなきゃ、対策の立てようもない…か。困ったなぁ。」

ブオンッ！フバァァァァァァァァァァ～ンッ！ギュキャキャッ！グォオオオオオ！ブオンッ！ブオオ～～～ンッ！（シフトダウンしてスタンドに入ってくるＳ１３）

美奈子「やっほ～♪ハイオク満タン、現金で。あ、会員カード渡しとくね♪よろしくお願いね～^　^」

池谷「いらっしゃいませぇ…あ、美奈子さん！久しぶりですねえ。」
美奈子「やっぱりＳ１３はＮＡでもパワーあるねえ…普通に乗っててストレス感じないわ。ＮＯＴＥと違って圧倒的に楽だわぁ。」
健二「美奈子さん、ご無沙汰してます^ ^ 元気でした？」
美奈子「うん、あたしは全然元気だよ？」
健二「あっ、そうだ…美奈子さんにも聞いてみるか…美奈子さん、最近…いとこのユーイチの事で何か知ってる情報無い？」
美奈子「ん？健二君のいとこのユーイチ君？はて…誰だっけ？」
池谷「えっと…ユーイチじゃ解かんないですよね。こんちゃんの事ですよぉ。」
美奈子「ああ…こんちゃん？こんちゃんがどうかしたの？」
健二「最近おかしいんですよ…心ここに在らずって言うか…物は無くす、段差を踏み外して怪我するし…」
美奈子「うわぉ…結構重症だねぇ。^ ^ ;;;心配だわ」
こんちゃんの事を本気で心配してる健二、池谷、美奈子…でもその原因の当事者だと微塵も感じてない美奈子って一体…
美奈子「でもさぁ…こんちゃんが挙動おかしいのって最初っからだったからなぁ…」
健二「そんなにおかしいの？で、どんな風に？」

美奈子「何か顔を真っ赤にして明らかにキョドっているし…理由は解らないけど事の他急いで帰っちゃうから…好きな女の子に貢いでるのかなぁ。まあ…バスに乗り遅れるっていうのもあるのかも知れないけどさ。でも、不思議な子だなぁ…と思ってあたしは去っていく後姿を見送っていたんだけどね。」

池谷「んっ？もしかしてそれってさあ…原因が美奈子さんなんじゃ…」

美奈子「へっ？あ、あたし？何で？あたしが働きだす前から店に毎日通って買いに来てたんだよ？さすがに違うでしょう…あたしが働き始めてからそういう状態ならその可能性も出て来るでしょうけども…」

健二「ん～…美奈子さんじゃないとすると…一体誰が…？」

※一同の謎が逆に深まってしまったみたいですね^　^　；；；（作者注。）

美奈子「最近、こんちゃん同窓会に出席したりした？そうすると前好きだった子と再会しちゃってまた火が付いちゃったとか…」

健二「ん？最近同窓会とか開いたって聞いてないなぁ。」

美奈子「あ、池谷君、コピー用紙1枚貰っていい？ちょっと整理してみようよ…」

池谷「あ、はいはい。お待たせです。コピー用紙と蛍光ペンとボールペンね。」

美奈子「サンキュ。えっと…まず気になる女の子と出会う可能性を書いていくね…」
・大学のサークルとかゼミ
・行き帰りのバスや電車の中で見かける
・ケーキ屋（＝美奈子？）
・趣味や生活の場で出会う店員さん（本屋とかコンビニとか…釣具屋さんとか釣りに来てる人の可能性もある）
・ＳＮＳ（または携帯アプリのゲームなど）に入ってるならそこでのつながりのある人…
美奈子「まあ…大体こんな感じかなぁ？さて…でこの中からまず可能性の低い条件を消してみる…と。まずケーキ屋って言うかあたしの可能性はさっき言った理由からも可能性は低いと思うんだよね…（赤いペンで消す。）ねえ？こんちゃんってＴｗ○ｔｔｅｒとかＦａ○ｅｂｏｏｋとかインス○とかやってる？」
池谷「ん～そんなに自分から発信するようなタイプじゃないんだよなぁ…」
健二「携帯でゲームって言うのもやってるのを見たことないんだよなぁ…」
美奈子「ん～じゃあ、ＳＮＳ、ネット関連は削除…っと。」（赤ペンで消していく。）
池谷「そうすると残るのは大学の校内の関係かその道中…またはこんちゃんが出入りしてる店の店員さんとか常連客が怪しくなる…か。」

健二「あいつの出入りしてる店って言ったら…このスタンドから信号を2つ先に行ったセー○オンか、駅の横のセ○ンとか・・・○○堂書店にジョ○サンのファミレス…隣のマツ○トキヨシに敢えて付け加えれば美奈子さんの所のケーキ屋位…か？」

美奈子「じゃあ…そこにこんちゃんが好きそうな感じの女の子が居れば…って感じかなぁ。これでだいぶ枠は狭まったんじゃない？」

健二「ホントはもう少し絞り込みたいけど…あとは尾行か。」

美奈子「うっそぉ、そこまでするの？マジで？プライバシーとか無さすぎじゃね？そこまではさすがにやり過ぎだと思うけどねぇ…」

池谷「後はもうド直球でこんちゃんに問い詰めるか…」

美奈子「ん～まぁ…気になるだろうけど、ほどほどにしてあげてね。」

そう言って帰っていった美奈子…スタンドでは相変わらず池谷君と健二君が樹を巻き込んで何やら作戦会議が行われていたようだ…。

（※この後…樹が上がってしまい、残っていた池谷と健二。そこへ知らずに家の原付のガソリンを入れに来たこんちゃんはこの2人に警察の取り調べも真っ青な厳しい追及に対してついに口を割り…美奈子に片思いという事がばれてしまう…。

あ～あ。この2人に知られちゃって良かったのか悪かったのか…マイペースなこんちゃんは今後周りに引きずられるように巻き込まれて行っちゃうんですよねぇ…南無。

（チ～ン））

取り敢えずその後のプロジェクトＤはというと…

タイムリミットから逆算した日の翌日…さっきはＮＯＴＥで拓海の実家を訪れていた。

営業時間が始まって間もない頃を狙う。今日は平日…拓海は昨日の夜から仕事で九州に物を運んでいると言う。人気のない店の前に立つ…そして入り口の扉をカラカラと・・・横にスライドさせて奥に向かってご挨拶。

さつき『おはようございます！油揚げと絹ごし１丁くださ～い！』

文太「はいよ～ちょっと待っててくれい。…おっ、珍しいな。銀色の悪魔が買いに来てくれるなんて…。」

さつき『へへへ。噂には聞いてたんですけどね。豆腐と油揚げの味噌汁が好きなもんでね？どうせならおいしいモノ食べたいしね。』

文太「まあ…ホテルにウチは卸してたりするから味には自信…あるけどな。」

さつき『なら間違いないでしょうっていう前提で来てます。（ニッコリ）』

文太「言おうとしてる事も読まれちゃってるのかよ…敵わんな。それに…この前の遠征先の○○○峠であいつが事故に巻き込まれたこと…もあってだろ？そんな予感はし

てたけどな。」

さつき『いやぁ、俺も驚きましたよ。早上がりの日だったんで美奈子と碓氷のＩｍｐａｃｔＢｌｕｅの２人を引き連れて応援に行く途中の八王子の高速の出口にそろそろ…って所で高橋　涼介から電話がかかってきて。でも、まあ2人とも、ウデを持ってるから本人は掠り傷程度で済んでるだろうけど…って正直思いましたけど、車は…俺があの後工場に見に行った感じではほぼ全損でもおかしくないと思います。それをホワイトボディーから起こそうとしてるんですから…全くすげぇっすよあの男…高橋　涼介ってヤツは。ただＦＤもだけど…８６のパーツのストックがほぼ欠品らしくてね。俺が思いついた京都の８６専門店に連絡してみたんですけど、どうしても3つパーツが揃わなくてね。その入荷が正直1か月半以上かかるかもって言われたんで…。』

文太「いや…正直それを聞いて驚いてたんだ…程度の良い中古のフレームに載せ替えるんだろう…位にしか思ってなかったのにホワイトボディーから作るなんてな。時間もないだろうに。あいつは医大生だろ？いくら金があっても国家試験や卒業論文ってもんが待ってるはずだ…。下手すりゃ冬越しちまうぞ…ってな。そしたら部品の手配に向けて頑張ってる人間が1人居るってな。その行動力には恐れ入ったぜ。」

さつき『いやいや、俺は裏方ですからね…得意だし。』

文太「いくら得意でも、８６の部品作ってた金型屋を割り出して強引に頼み込んで予

備も含めて作ってもらうなんて…どっからその熱意が出て来るんだ？異常だぞ？」

さつき『いやぁ、今、８６の人気は拓海君の影響でまた中古車市場で盛り返しつつあるんですよ。だからね…部品を再生産してくれれば事故は起これば部品が必要になる、そうすればお宅の工場も儲かる。絶対損はさせない！って言ったら作ってくれました。』

文太「策士だな。よくそんな殺し文句を思いついたもんだぜ。」

さつき『伊達に仕入れとかの交渉してきてませんって。殺し文句で落とすのは常套手段でしょう？ま、そのお陰で８６のホワイトボディーで３台分、ストックしときましたから。プロジェクトＤが終わっても長く乗って行けますよ。大事な８６です、俺らで守らなくちゃね^^ 錆とかにはこの時代の車は強くないですから組み上げる時には亜鉛メッキをして錆に強くしていくように指示してますから。』

文太「少し位なら俺が出してる所にもストックあっただろうけどな…」

さつき『ああ、鈴木さんの所にも電話して欠品してたんでストック分で送っておきました。』

文太「はぁ？昨日のうちにそんな事してたのか？まったく…仕事ちゃんとやってるのか？」

さつき『やってますよ？昼休みに金型屋と部品屋に電話して仕事が上がってから直接

越谷に乗り込んだし。その場で鈴木さんに電話して送る手はず取りましたよ。』

文太「何ちゅ～行動力だよ…仕事のできるやつって～のはこう言う事を言うんだろうな。負けたよ。」

さつき『まあ…今回はちょっと不可抗力とは言え、物凄かったんでね。高橋　涼介だけじゃお手上げになってるのが目に見えてたんでこっちから動いてみました。一応隠密部隊…っていうか、ドライバー2人には美奈子とひっくるめて〝プロジェクトDの暗殺部隊（アサシン）〟って言われてしまったのでね。（ニヤリ）』

文太「ヲイヲイ、すげぇネーミングだな。ホントに壊滅しかねないから恐ろしいな。」

さつき『やるからには…叩き潰して2度と起き上がれない位まで行くつもりでしたから。その前に逃げて行きましたけどね…』

文太「まあ、そうだろうな…あんたが本気なのはよく解ってるしな。」

さつき『って事でご報告を兼ねて、拓海君をあんまり厳しく叱らないでやってくださいね。あ、油揚げと豆腐の代金…いくらでしたっけ?』

文太「ああ、金はいらねぇよ。今回色々してもらっちゃってるしな…」

藤原豆腐店でありがたく油揚げと豆腐を頂いて一旦帰宅…今日は休みでちょうど起きてきた美奈子にこれを渡して…仕事に向かう…

スタンドに着いてロッカーで着替えていると…ピロリンッというあんまり聞いた事

の無い着信音が。
携帯を見ると…謎のメアドから来た不吉な予告。読んでも消す事は無く、高橋　涼介にも見せるつもりでいた。
下に降りると池谷君がちょうど接客が一区切りついて自販機でジュースを買ってた。
池谷「さつきさんおはようございます…って何かありました？」
プシュッと炭酸飲料の栓を開けながら聞いてきた。
さつき『あ？あぁ…おはよ？ん？何か変な顔してるって？…そりゃ、多分このせいかもな。』
さっきロッカーで着替えてた時に聞きなれない着信音で届いたメールを見せる…。
池谷「なっ、なんですかこりゃ…パッと見からして尋常じゃない…脅迫メールじゃないですか…この事は高橋　涼介には？」
さつき『いや、ついさっきこのメールが来たばかりだし…まあ見せるつもりでは居るけれど。それなりに探ってからでも良いかなって…。』

池谷「イヤイヤイヤ…これってマジで警察レベルですよ?あ、さつきさんに届くって事は美奈子さんとか沙雪さんは?下手したら真子ちゃんにも届いてるんじゃ…でも真子ちゃんはまだ入院中だし…

（※真子ちゃんの入院した経緯は３ｒｄ　Ｓｔａｇｅのそれぞれの恋愛事情…２―２～２―５を参照してください。この部分にＲフラグは無いので大丈夫なはず。作者注。）

２人に電話…してみますか？　」

さつき『あ～、美奈子は今日休みだから何かあれば電話か直接ここに来ると思うよ。沙雪だって電話してくるだろう…１人で溜め込むタイプじゃないし。』

池谷「ま、まあそうですけど…何か引っ掛かりません?手の込んだいたずらだけじゃないような…」

さつき『取り敢えず連絡してみるか。池谷君…悪いけど店見ててもらっても良い?裏で電話してくるわ^^;;;』

池谷「了解です。任しといてください^^」

ホント、池谷君が居ると作業もできるし、ありがたい。

さつきは裏の事務室の机にメモ紙を置き…ボールペンを持ちながら電話をかけ始め

る。

さつき『あ、美奈子?俺だけど…ちょっと聞くけど、携帯に変なメール来なかった?ん?あ、来てる?それって何時頃?…あ、俺にもそれ位の時間で送られて来ててさ。沙雪と高橋　涼介にも連絡してみようようかと思ってさ…。」

取り敢えず美奈子が沙雪と真子ちゃんにメールしてくれると言うので高橋　涼介に先に電話してみる。するとｌコールで出た。若干こっちが驚いたわい^^;;;

さつき『あ、高橋のお兄ちゃんかい?さつきだけどさ…変なメール来た?あ、やっぱり来てるか…え?拓海と弟にも来たってか。こりゃ本気でプロジェクトＤを潰しに来てるな…しかも内容的に俺と美奈子が関わってるのが気に食わないって感じを受けないか?』

高橋　涼介「ん?まぁ…そう取れなくもないか。心当たりとか何かあるか?」

さつき『ん～、この前の○○○峠でつぶし損ねてるから…ってだけじゃなさそうだしな。ホワイトボディーや他のパーツを俺が動いてかき集めてるのを知ってる感じがするからな…。金型屋を含めた部品屋の関連かあの峠の連中か…その先の神奈川の連

中って事だってあり得る。俺が神奈川の人間だろ？元々は。〝裏切者〟扱いかもしれねぇしな。』

高橋　涼介「まあ…俺の方で出来る所から調べてはいるがな。ただ警戒するに越した事は無い。美奈子さんにも、ＩｍｐａｃｔＢｌｕｅの２人にも…周囲には気を付けてくれと言っておいてくれないか？」

さつき「美奈子には真っ先に言っておいたけどな。沙雪や真子ちゃんにも周囲に気を付けるようには言ってもらってる。あの２人も美奈子に車を貸した事でこっち側に巻き込まれてるからな。それにしても…回りくどい事をしてくるんだな。心理的作戦のつもりなのかな？」

高橋　涼介「それだけプロジェクトＤの周りが暗殺者軍団（アサシン）と協力者で出来てると思ってるんだろ。」

さつき『２人で〝軍団〟って言うのか？軍団って言ったら少なくとも数十人単位じゃないのか？』

高橋　涼介「向こうからしたらたった２人の殺気には見えなかったんじゃないのか？それこそ何百の暗殺者軍団が控えてると思ってたのかも知れないぞ？」

さつき『んなアホな^　;;;;ま、お互い変なメールが来てる事だし、気を付けるに越した事は無いって…な。悪かったな、突然電話して。』

高橋　涼介「フッ…ま、いいさ。これからも何かあったら電話してくれ。こっちからも何かわかったら電話かメールする。」
さつき『おう、了解です。じゃ、またな。』
ピッ…

切った所でメールの着信。開くと美奈子で、沙雪と真子ちゃんには今の所被害は無いらしいが…念のため気を付けるように言ってあるらしい。

（※さて…敵が動くなら迎撃も兼ねての臨戦態勢を早急に…か。）
独り言をつぶやいたさつき。（先手必勝とも言うし…まずは根回しからかな？）
まず、部品屋と金型屋、板金塗装工場にプロジェクトＤのメカの人達やサポート隊にも取り敢えず警戒するように連絡。
仕事の休憩中にコピー用紙数枚を抜き取ってきて俺の知ってるプロジェクトＤの予定と原作をすり合わせてみる事に…。
確か原作ではヤビツでチーム２４６とやったり、高橋　涼介の恋敵と箱根ターンパイクでバトルしたり、最後は確か大観山からスタートの椿ライン下りで８６対決だったはず…

遠征ついでに国府津の田島峠とか秦野の震生湖の辺りとか大磯の虫窪の辺りとかもホームだったし肩慣らし入れてぇな…とか色々思う所はあるのだけれど、

まずは原作に沿うところから行かないと俺だけの単独行動じゃないし…

そうすると…先ずはヤビツか。ここの攻略はネットで見る限り地形もコース幅も何ら変わりないので路面状況だけ軽く見ればドライバーには細かい所まで伝えられる。

ま、問題ないな。次に走る人物情報のチェック。う～ん…通り一遍で掴み切れねぇ～な。

（?▽?；）

やっぱ、実際に走った方が早い事に気が付いた。明後日休みだったな…ＮＯＴＥで視察してくるか。そこまで調べて仕事に戻る…と

オイル交換×２台（うわぉ…しかもこの車って営業車だから時間かけられないし、オイルエレメントが面倒な所に付いてるやつじゃん…火傷覚悟だな〉〈；；；）

それに、ＬＬＣの抜き替えにドライブシャフトのブーツ交換…作業がてんこ盛りじゃんか

（?▽?；）

それまでひたすら頑張ってた池谷君を休憩させて作業を黙々と頑張る。給油は高校生の

バイトと樹に任せてる。
１時間後…池谷君の昼飯休憩が終わった頃…オイル交換は終わり、ＬＬＣの抜き替えは
エア抜きしつつ、リザーバータンクに多めに入れながら暖気終了後スロットルを開けて
冷却水路のエア抜き実施。ドライブシャフトは左が終わって右の古いシャフトブーツを
剥がし終わってパーツクリーナーでグリス落として新しいシャフトブーツの片側を
固定してグリスを注入中。現状で残ってた作業の８５％位終わってたので
池谷君が２度見してた^^；；；

池谷「うぇえええ！もうそこまで終わっちゃってるんですか？だって前（ドライブウェー＝給油機の並んでるスペース）を見ながらでしょう？」
さつき『まあ…樹も居たし…ね^^；；；；』

暫くして…残りの作業が終わると早番だった樹の上がる時間に。

池谷「樹～！お疲れ！上がっていいぞぉ！」
樹「池谷先輩、さつきさん！上がっちゃいますね^^じゃ、また明日きます！」
さつき『おう！お疲れぇ～』手を洗いながら答えた。

（※――――ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ　ここからはさつきｓｉｄｅで進行します――――）

それから2日後…公休日なので朝、美奈子と同時に家を出て神奈川に向かう。
あ、偵察だしちゃんと目立たない様にＮＯＴＥで行動してますって^^；；；；
まずは秦野中井ＩＣで降りてヤビツ峠に一直線。あ～この道変わらんなぁ…
舗装も荒れてるし道幅が一定じゃないし…^^……ここで走るならギリギリまでコース幅を取る事とすれ違うタイミングを間違えないこと…沙雪がこういうの得意なんだけど、
このタイミングで見えたからあと2つ先で出会う…とかね。それに昼間だと競技用の
チャリンコに乗ってる連中がやたら多くて真ん中まで出てきてコーナリングしやがるから危なくって。
ん？平日の昼間に走り屋仕様が居るんだ…へぇ…珍しい。こっちは群馬ナンバーだ

し、
観光客を装ってちょっと気配を消して後ろに付いてみるかな…どんな運転するんだろ？
コーナー２つ見て解りました。はっきり言いましょう！樹より下手だわ。（；^＿^Ａ
カッコ悪いねぇ。邪魔だし、譲っていただこうかな…バスも運行されてる区間なので
コーナーの出口で並んで一気に前に。
県外ナンバーのＮＯＴＥに抜かれたのが悔しいのか露骨に煽って来てるけども…
さつき『さて。ここから先の溝落としのできるＳ字の区間で…俺に付いて来れれば良いね…』っと呟く。
一気に溝落とし敢行。一気に離れる車間…一瞬何が起こったんだかわからないって顔で
間抜け面でポカーンとした後必死にアクセル踏んでる様だけどもライン取りはしっかり
しようね…無駄なブレーキングが増えるだけで速くはならないから。

次の道幅２ｍの区間で…一気に加速。ダメだなぁ…ここで７０位でビビってちゃ。
俺が現役の時…美奈子と１１０ちょい位でここ抜けてたんだけどな…まあ、美奈子が異常なだけなんだけどさ。（↑棚に上げてるけどお前もだかんな！　作者注。）
展望台まで来る頃には影も形も見えなくなった…この先…清川村側の〝裏ヤビツ〟に
入っていくともっとデンジャラスな光景が広がるんだよな…たまにがけ崩れがそのまま
放置されてたり、雨が続くとどこまでが道でどこからが川だか解らなくなるし…
突如、目の前を鹿が出てきて横切ったり…あ、湖にかかる橋とトンネルが見えてきた…
そろそろＴ字路で左が山梨の道志方面で右に行けば半原経由で厚木方面…っと。
ここでサイドターンして秦野側に戻りますかぁ！
ブォオオオオンッ！ギュキュキュッ！グオッ！グオッ！グォオオオオ～～ンッ！
戻っていくと…あ～あ、どこのバカだよガードレールに突っ込んで〝クワガタ虫〟になってる奴は…って、これさっきの奴か^　^　;;;;　ここは放置！　え）
人物の特定は…ま、いっかぁ。とヤビツをそのまま去って無性にホームを走りたくな

り…
ヤビツを降りてきてＴ字路を右折…渋沢に向かう途中で左折してＲ２４６を跨いでっと…
小田急線を潜り抜けてビーバー○ザン（※神奈川ローカルなホームセンターね）のある
交差点を右折して山に入っていく。
（うっわ…この感じ懐かしいな…）思わずつぶやく独り言。
上り切ると震生湖の看板が見えるけど、ここを道なりに進んで下って上って左折して…
その先の東名高速にかかる橋を越えてＴ字路を右折。
さてと〝広域農道やまゆりラインを一路…田島峠（通称〝みかん山〟）に向けて走る。
ここは平日の昼間は特に車が居ないから走りやすいけど…
たまに白バイ居るんだっけか^^；；；採石場を横目に道なりに進めば最後にＴ字路。
ここを右折すれば田島峠。ここも曲がってすぐにネズミ捕りをやってる事がある…
って、おっとぉ～やっぱりやってるじゃないかぁ。あっぶねぇ～^^；；；
時間軸がずれててもやるのは一緒なんだねぇ…
ここは自分的には二宮側から国府津側に上っていくと上りはカーブも比較的緩やか

で

ハイスピードセクション。逐道を越えて下りに入ると道幅も若干狭くなるけど…

まあそこそこ出せる。

一旦、下り切った交差点を越えてUターン、元来た道を走り始める…

さつき『そう言えば…文太さん言ってたっけか。ホームのありがたさに気が付くときがある…ってな。確かにホームだからできることもあるしなあ…』

久しぶりに走ると新鮮に感じるもので…（ん～ならもう1個行ってみるか…）

…田島峠を下り切ってやまゆりラインに戻らずそのまま二宮の方向に直進…

坂呂橋の交差点を右折、次を左折して坂を上って下り切った右手に西友がある交差点を

右折して…南に少し走ると最近全然来てなかったのに変わる事の無かったタクシー会社のある交差点を左折。一路、虫窪を目指して上がっていく。ここは免許を取って初めて

走りこんだ場所…そう、俺の走り屋人生の出発点。

ホーム中のホーム。走り始めた時の思い悩んでた事まで一気に思い出しながら走っていく。頂上まで行くと路線バスが。

あ、そっか、ここって路線バスの運行区間だったね^　；；；；

時間調整してるようだったので一気にパスして下り始める。
〝昔、ここのＳ字コーナーがうまく処理できなくって悩んだ時期があったっけ…〟
とか、色んなエピソードが出て来る。
ホームを回ってるうちに…　走ってて唐突にもう１度実家を見て諦めを付けたくなった。
ここからなら１５分の距離…この辺りになると信号のタイミングまで知り尽くしてるから
ほとんど信号にも引っ掛からない。
到着した２００８年に引っ越してくる所はまだ畑のままだった。
フッ…と納得した笑みを浮かべると車に戻り、元々住んでいた引っ越す前の家に行く。
だがそこには意外な出来事が待ち受けていた…
近所の空き地に車を止めて歩いて通りの一番奥の家を目指すと…家は無くなっていて…
綺麗に整地され、駐車スペースと思われる部分にコンクリートが打ってある。
奥の水路側の壁に寄せてトレーラーハウスが置かれていて、しっかり電気の配線もされてるし、ガスボンベに水道も完備されてる様子。

驚きを隠せないまま、その前に置かれたポストを見る…そこに書かれていたのは

〝小長井さつき、沙雪、美奈子〟の文字が…

さつき『は？ちょっと待て…この展開ってどういう事だ？何も聞いてないし、いつの間にこんな事になった？マジかよ…』

ブツブツ独り言を言っていると背後に人の気配。振り返るとそこに居たのは沙雪と美奈子!?やべぇ、ダメだ…頭が付いて行かない…こめかみの辺りを押さえて蹲る俺。

２人は俺を両脇から抱えるようにしてトレーラーハウスの中へ。奥のベッドに連れていかれた。

そこでベッドに座る３人。

美奈子「言わなくてごめんね。実は先月の初めにね…あたしもここに見に来てたんだ。そしたらモノの見事にさつきの家…無くなってて不動産屋さんの管理地になってたのね。で、沙雪にその場で電話をしたらね…」

視線を沙雪に送る。

沙雪「美奈子！今すぐその土地押さえて！って言ったわ。ここをあたし達のセカンドハウスにすれば良いじゃん？ってね。」

美奈子「それにね…家だと固定資産税掛かるけど、トレーラーハウスだと固定資産税掛からないから土地だけの税金で済むって。」

沙雪「費用は会社の役員手当で賄うって事で。」

さつき『は？何か色々ツッコミしたい所が満載なんだけど…???まず、先月来てたの？ここに？しかもここの土地が売りに出てるって凄いタイミング…２番目、すぐに押さえろって？役員報酬で払うって誰の役員報酬？それに…ポストの表記。まだ俺と沙雪は結婚して無いのに…？え？え？説明プリ～ズ』

沙雪「じゃあ、まああたしから説明しようかしら。１つずつ順序だててね。

まず１つ目。ここ、ダーリンの実家があった場所だけど、今から１か月ちょい前に長女の智子さんが結婚を機にご両親も同居するって事でどいたみたい。

で、美奈子はこの世界に来てから神奈川に行った事が無いって事で

来てみたら話に聞いていた家が更地になってて不動産屋の貼り紙が出てたのを見てあたしに連絡してきた訳ね。

２つ目、役員報酬の話。あたしが代表取締役の役員報酬を給料と別に受けてるのは解るよねえ？

ついでに美奈子もカフェの店長になった時に取締役幹部を引き受けてもらってます。

だからここでも役員報酬が給料と別に出てる訳ね。で、更に再来月のあたしの誕生日に入籍…って言ってくれたじゃん？って事でおめでとう、さつき君にももれなく〝高崎製菓株式会社の取締役員〟の役職が追加されて役員報酬がちょこっとですけど出ます。

だからこの3人の役員報酬でローン組んじゃえば支払えなくはない…って事。」
さつき『へぇ～初耳な事がいっぱい…っていうか、美奈子って店長兼役員だったの？マジか…その割にカッコとか全然変わらないね^^;;;;』
美奈子「別に店長の職と役員を混ぜる事は無いし、年中着飾って無きゃいけないって訳でもないし。着飾ってたらパフェは作れないしね^^;;;;
で、役員報酬が…引き受けてからの2か月で1年分のバイト代かな^^;;;;
手つかずだったし…土地とトレーラーハウスの購入代金の頭金に入れちゃったのよ^^;;;」
沙雪「って事なんで今後はもう1個トレーラーハウスを増設予定だから…
それを玄関を兼ねた廊下でつなげば3人が無理なく住める家が神奈川にもできたって事。これから神奈川の2戦もあるんだし…あたし達はここから向かえばOK。
車も2台止められるし。」
さつき『話の規模がデカいネ…。あ、それに俺がここに来るってよく解ったね？』
美奈子「そりゃあ…ヤビツからホーム回るなら…ここにも寄るって確信あったしさぁ…
だからあたし達は一気に朝、役員会だけ出てここに一直線で来て待ってたって事。」
さつき『はぁ…この2人凄すぎるわ…降参です。』

沙雪「だから襲った次の日の朝言ったでしょう?”他の世界から迷い込んで来ちゃった事を話した所で信用しないか、あたしが離れるとでも思った?逆よ。絶対にこの世界から離してあげない。ダーリンはあたしの愛をひたすら受け続けてれば良いのよ。”って。

覚えてない?」

さつき『うっ、そ、そ～言えば…そんな事言ってたけど、こんなに大々的だなんて…(一般庶民に考え付くはずなかろうに^ ^ ……って言うか…沙雪の本気ってすげぇ～な。やっぱ、エロ・テロリスト…爆弾の落とし方がエグいなぁ。)』

沙雪「で、納得してくれたかしら?で、改めてここはあたし達3人の神奈川のおうちなんでくつろいじゃってくださ～い(^ ^ ♪

何ならあ～んな事も、こ～んな事もあたしに任せてもらえれば…」

美奈子「ヲイヲイ…何をサラッと従妹の前で言っちゃってんのよ^ ^ ;;;」

さつき『ん～さ、さすがに今日は遠慮しとく。』

沙雪「え～!!久しぶりに…フッフッフって思ってたのにぃ～。」

美奈子「あ、そうだ!思い出した。高橋　涼介から電話来てない?」

さつき『あ、電源切れてるかも…しかも車の中に置きっ放しだし。』

沙雪「…はぁ～、まったく。そんな事だろうと思ったわよ。犯人が解ったってよ。

メールを送ったのは前に埼玉で妨害工作をしたけど、後ろに付いてた暴走族が高橋啓介の高校の時の舎弟だったから丸く収めて終わったんだけど…

他のヤクザっぽいのに依頼したらしくてね…ただプロジェクトＤの暗殺部隊の尋常じゃない殺気にヤクザが怖気づいて、一旦撤退して別角度で心理戦を仕掛けてきたって訳。

で、高橋　涼介の知り合いの弁護士から手を回して県警本部のお偉いさんを使って依頼したヤツごと別件で逮捕して厳しく追求中だってさ。」

さつき『よくもまあ…短時間でそこまで調べたね…^^;;;』

沙雪「ま、すべてがクリアになったから、高橋　啓介と拓海君の車が直ればセッティングをして…間に合わなきゃ暗殺部隊で制圧する…って事になってるらしいよ。」

美奈子「だから今夜はここにＳ１３とＳ１５置いて行っちゃおうかって。」

さつき『ん？Ｓ１３は解るけど…Ｓ１５？美奈子が運転して持ってきたのか？何でも水面下で遂行するねえ…って事でＳ１３とＳ１５をここに置いて…ＮＯＴＥで帰るって事ね？』

沙雪＆美奈子「「しょ～ゆ～事ぉ」」

※で、結局ＮＯＴＥに３人乗車で帰宅。神奈川決戦が終わるまで沙雪が美奈子の送迎

するんだって…マジでこの２人仲良すぎ^　^　;;;;;

（まあ、真子ちゃんも入れれば仲良し３人組なんだけどさ。何か更に結束力固くなってる気がするんだよなぁ…）

で、週末…を前に車が無事戻る。

（※――――ここからはさつきｓｉｄｅで進行します――――）

結局ＦＤも８６もしっかり完調な状態で戻って来たので、週末は俺と美奈子がドライバー２人をｍａｎ　ｔｏ　ｍａｎで横に乗ったり、せっかく持ってきたからＳ１３とＳ１５で先導したり

他の俺のホームコースも走らせて気分転換させたりしてあれこれ使えそうな走り方を伝授…。

そしたら元々器用な２人。キチンとこちらの教えたことを理解して良いタイムを連続できるように…とりあえず１つ壁を乗り越えたかな…。

北条と横にくっついてる関西弁のおっちゃん…何て言ったっけ？あ、久保さんだっけ？

あのおっちゃんにも休憩してたら話しかけられたっけ…Ｓ１５が湘南ナンバーだから気になったんだろうけどさ。

でも、俺達２人が〝銀色の悪魔〟と〝漆黒の闇に浮かぶ銀色の幽霊（ゴースト）〟だ

とは解って無かったらしく…本番で高橋　啓介と拓海が相手をやり込めた時のあの悔しそうな苦虫を噛み潰したような顔を見て…正直スカッとした^^コーチした甲斐があると言うものです。

しかもとどめを刺すように高橋　涼介があの２人の目の前で俺と美奈子の正体をばらしたもんで、

サイドワインダーもそうだけど、見に来てて傍にいたチーム２４６の連中とか

ゼロのお兄さんが目を丸くして驚いてたっけ^^;;;;

まあ、〝銀色の悪魔〟も〝漆黒の闇に浮かぶゴースト〟もどっちにしても生きる都市伝説みたいなものだしねぇ…

あ、そういえばこの日沙雪が前乗りしちゃったせいで、真子ちゃんは池谷君が迎えに行って一緒に見に来てたな…。そりゃあもう、ラブラブモード全開でしたけど…

美奈子と俺が関与してしまった事で原作とちょっと離れてしまったけど、

最後はプロジェクトＤのＷエースが復活、見事勝利を収めたことでプロジェクトＤの活動もこれでピリオドが打てたし、どうにか当初の原作の結果のラインに戻せて良かったなって正直思った。（←ヲイヲイメタいって^^;;;）

この後…Ｄのエース２人はそれぞれレースの道に進むのだが…俺たちの手助けはこ

こまで。後は自力で頑張ってください。俺はレーサーじゃないからそっちの事は全く知らないしね^　^　;;;;

真子ちゃんに聞けば解る事もあるんだろうけどさ…俺はスタンドのお仕事もあるし、大きな声じゃ言えませんけど、俺の身に結構大きな転機になるかも知れない事柄が…あるとか無いとか^　^　;;;;(←どっちやねん!!)

それに…ついでと言っちゃなんだけども、沙雪の実家の取締役の会議も始まるしね^　;;;;(←ついでって^　^　;;;;それ結構大事だからな!　作者注)